大正國語讀本

第三修正版

巻一

42
810
大14

41543

教科書文庫

4
810
41-1925
20000
81508

資料室

大正十四年十二月三日
文部省檢定濟
中學校國語科教科用

4a
810
K14

係科孝一編

大正國語讀本

東京 合資會社育英書院發兌

広島大学
教
81508
図書

大正國語讀本卷一

目次

一 東宮殿下御外遊雜記……（東宮殿下御外遊記）……一
二 京都の春……大和田建樹……二
三 春の曲……島崎藤村……四
四 名人團平……（吐雲錄）……六
五 日の岬……渡邊霞亭……三
六 耳の趣味……鈴木鼓村……三
七 心柄……北原白秋……三五
八 パリの五月……島崎藤村……四一

九　蜂が團子をこしらへる話……吉村冬彦……四五
一〇　屋上の一夜……大町桂月……五五
一一　燈臺守……藤井乙男……五九
一二　一燈錢……久坂義助……六四
一三　松下村塾……德富健次郎……六六
一四　山田長政……平井晩村……七〇
一五　達磨の話……小泉八雲……七六
一六　高原の野營……上原敬二……八四
一七　夏の夜……土井晩翠……九一
一八　螢……渡瀨庄三郎……九三
一九　富士登山　その一……荻原井泉水……九九

二〇　富士登山　その二……一一〇
二一　小話五則……和田垣謙三……一一七
二二　湘南雜筆……德富蘆花……一二三
二三　ビスマルクの幼時　その一……落合直文……一二六
二四　ビスマルクの幼時　その二……一三〇
二五　ポチ……長谷川二葉亭……一三四
二六　子供の時の家……夏目漱石……一四九
二七　月見草……水野葉舟……一五六
二八　智慧伊豆守……大町桂月……一六四
二九　心の修行……村井寛……一七〇
三〇　ペンギン……杉村楚人冠……一七三

三一　大海原……坪内逍遙……一八一
三二　加藤清正と熊本城……大類伸……一八三

大正國語讀本　卷一

一　東宮殿下御外遊雜記

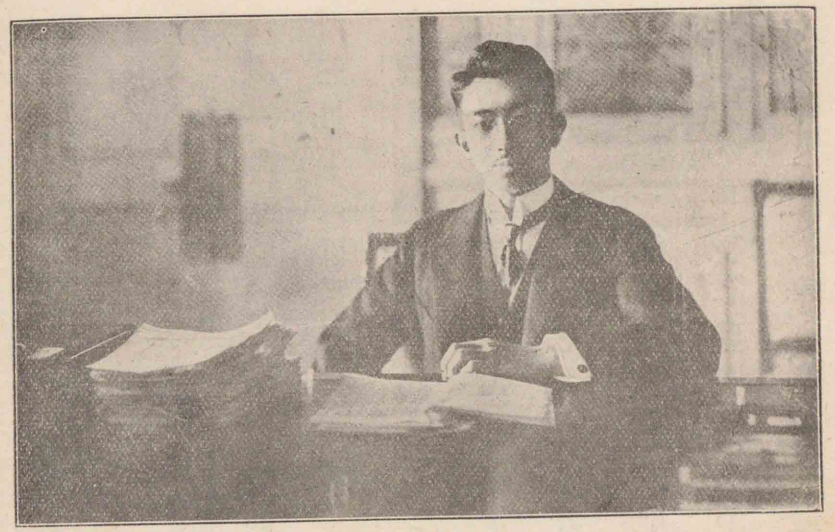
三月十八日　大正十年

御召艦　軍艦香取

シンガポール港　英領マレイ半島の尖端にある港

三月十八日。　金曜。　晴。

午前七時過ぎ、御召艦はシンガポール港に近づいた。こゝでも私は、國民の皇室に對する、何ともいへぬ美しい至情を見て涙ぐんだ。　そこの在留邦人は、二千餘トンの明智丸といふ汽船で港外にお出迎申しあげた。　御召艦が近づくと、明智丸の甲板に整列してゐた在留邦人は、艦上にお出ましの殿下に對し奉り、恭しく最敬禮を行つた。　殿下からも、再



最近の東宮殿下御眞影

三御答禮があつた。するとその人々は、殿下の御丁寧な御態度を仰いで、歡喜の情が湧立つたと見えて、一同伸上り爪立つて、どつと萬歲を絕叫するのであつた。然るに殿下には、この萬歲の絕叫に對しても、更に二度三度と嚴肅なる擧手の答禮を賜うたので、これを拜した在留の邦人たちは、俄にわれにかへり、

敬虔な態度で殿下の御答禮に對し奉り最敬禮を行つたが、燃立つ情は抑へ難く、またも萬歲を怒濤の如くに響かせて歡喜雀躍するのであつた。御年若の殿下の氣高いお姿を拜し奉つた、海外同胞の深刻な感動は、「敬」とか「禮」とかいふ意味を超越して、眞に親子骨肉の間の喜悅を交へた至情であつた。

御召艦は更に港内深く進んで行つた。すると私は、更に尊い印象を腦裏に留めた。この時港内に、二三の本邦貨物船が碇泊してゐた。御召艦の近づいたのを見たこれらの船員は、仕事着のまゝ、その船の前甲板にお迎へしてゐたが、僅か十數間のところを過ぎる艦上の殿下を拜して、謹んで敬

禮を行つた。殿下には前の如くに、丁寧な擧手の答禮を賜はつた。船員はその畏き御姿に強い感激にうたれたかばらばらと欄干に駈寄つて萬歳の叫を擧げた。御召艦はその船の左舷を掠めて過ぎる。歡喜に醉つた船員は、恰も子供のやうに先を爭つて、中甲板への階梯をころげるやうに駈下りて、更に後甲板へと飛上り、欄干からのり出して萬歳を奉唱する。殿下は又もこの聲に御答禮を施された。粗末な仕事服の船員が我を忘れた狂喜の姿と、氣高い殿下の嚴かな中に御優しさの溢れた御答禮とに、私はたゞ胸迫つて、何ともいへぬ感激に打たれたのであつた。

三月二十六日。土曜。晴。

シンガポールで、在留邦人の某氏が可愛いゝ小猿を献上した。殿下は殊の外お喜びになつて、晝は上甲板に繫ぎ、夜は中甲板の小屋に置いて御愛玩になつた。ところがこの小猿は中々のいたづらもので、艦具の螺旋をとつては、口に入れることが度々であつた。

ある日、小猿が例のいたづらを始めた。水兵はその螺旋を取戻さうと苦心したが、いたづらものは、これを口の中に入れて頰張つてしまつた。

この時、殿下は甲板にお出ましになつて、水兵と小猿とが小競合をしてゐるのにお氣附になつた。殿下は御微笑なさりながら、

「どうしたのか。」

とお尋ねになつた。

水兵は振返つて、殿下のお姿を拜すると敬禮をしながら、

「猿が螺旋を拔いて口に入れました。」

と申しあげた。　殿下は輕く「さう」とお肯きになつて、御自身に小猿をお捉まへにならうとし、水兵もお力添申しあげたが、小猿は逃廻つて、とう〳〵螺旋を出さなかつた。　そこで殿下は水兵に角砂糖を御命じになつて、小猿に與へて螺旋をお取戻しになつた。

「猿はこれを惡いと思つてゐないのであるから、何か代りをやつて、無理には取らない方がよいよ。」

御誕生日

明治三十四年四月二十九日

閑院宮殿下
載仁親王

と殿下は氣の毒さうな御口調で、直立の姿勢の水兵に仰せられた。

四月二十九日。　金曜。　晴。

今日は東宮殿下第二十回の御誕生日である。　空には一點の雲もなく、日本晴の好天氣。　春の海には小波がたゞよつてゐる。

午前八時半、東宮殿下には閑院宮殿下の御祝辭を受けさせられ、又、供奉員・御召艦乘組員の御祝詞をお受けになつた。

殿下には、この地中海上に於ての御誕辰日には、よほど御感慨の深いものがあらせられたと見えて、數日前にも、

「二十九日は私の誕生日だから、何か皆で祝ひたいものだ

が……。」

とおつしやるのを漏れ承はつた。　兩陛下の御膝下を遠くお離れ遊ばして、側近の奉仕の者も少ない今日の御誕生日であるから、殿下の御胸中を拜察し奉つて、艦内の者が擧つて、海神をも驚かすほど、殿下の爲に御奉祝申しあげたいと考へた。

この考は、乘組員全體の持つ心であつた。　であるから、艦内の裝飾にも餘興にも、御誕生日を祝ひ奉る誠意と、お慰め申しあげようとする人々の苦心とが表はれてゐた。　後甲板で、假裝行列や劒舞・尺八の餘興を台覽に供し奉つた。　印半纏の號外賣が鈴を鳴して「香取新聞號外」と叫びながら、その

一葉を殿下に差上げた時には、につこりあそばされたほどで、實に和氣靄々たる光景を呈した。

夜になつても、この佳き日をお祝ひする美しい有樣がつゞいた。　非番の兵員は殿下を中心に後甲板に團欒をつくつて、餘興の活動寫眞や講演を樂しんだ。　私はこの團欒を局外から眺めて、たゞ涙ぐましい嬉しさを感じた。　その中のある活動寫眞を見ようと、私がやゝ人立の少ない所に立留つた時、暗い中から、

「おい、風上に立つちやいけない。　殿下の方に風が通らないやうになるぢやないか。」

といふ聲がした。　振返つて見ると、一人の水兵が、私を同輩

と見違へて注意したのであつた。「殿下の方に風が通らない。」あゝ何といふ親しみに富んだ言葉であらう。愛を外にした理窟一遍の敬の中には、見出されない言葉である。

御召艦香取の乘組員はほゞ八百人である。一戸を五人平均とすれば、こゝに百七十戸の一村がある。あゝ、かゝる美しい村で、日本全體を形づくりたい。それは上下を通じて、各自が尊い分擔を通して、謙讓にしかも確信に充ち滿ちた生を營むこの村の如くしたい。愛に滿ちたこの村の如くしたい。否、斷じてさうしなければならぬ。これが我々日本國民の使命である。

（皇太子殿下御外遊記）

皇太子殿下御外遊記　二荒芳徳・澤田節藏共著。大阪毎日新聞社發行

二　京都の春

山紫に水明かなる處、つゝじを柴に折りそへて戴きつれたる大原女も、いと風情あり。如意嶽より吹きくる春風は、輕く我が袖を拂ひて、行くへは遙に堤の柳の絲にあり。

花に誘はれて佛にまうで、佛に導かれて花を見る客、けふも清水觀音の堂前をみたしぬ。舞臺の上より見おろす人、舞臺の下より咲きほこる花、あたかも一幅の四條畫なるに、姥はこの間に立ちて「蕨餅めせ。」など呼ぶ。しばし休みて眺め渡せば、淺黃に藍に霞みわたれる八幡・山崎のあたりもゆかしきに、東寺の塔の松の間に墨がきにせる筆の力こそ面白けれ。

大原女　大原村の女。大原は京都北方の村

如意嶽　一名大文字山。京都の東方にある名山

清水觀音　京都東山の麓清水坂の上にある。曹洞・眞言の二宗を兼ねる

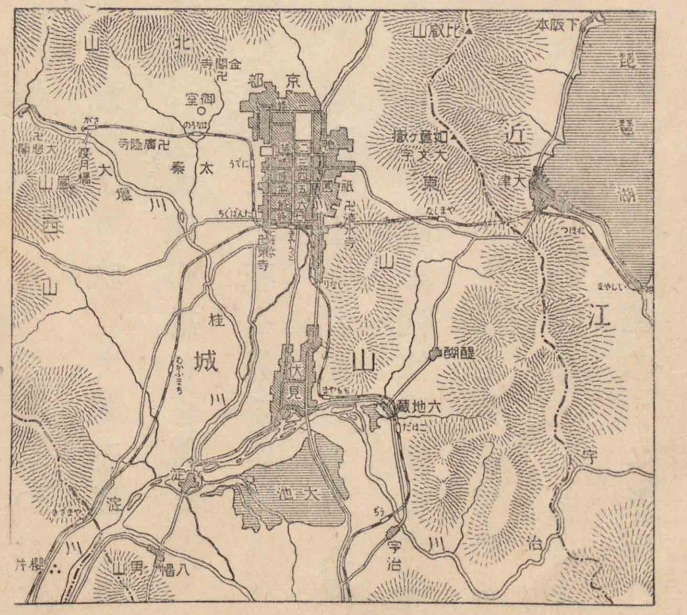
四條畫　德川時代に松村吳春が開いた一派の畫

八幡　山城綴喜郡男山の東麓にある町

山崎　山城乙訓郡の南方にある村

御室　仁和寺の別稱。宇多天皇の開基、眞言宗。京都の西方にある

西山の花見る人は、多く先づ御室を指す。松青く樓門赤く、茶煙たえ〴〵にあがりて、花極めて白し。塔は霞をもれて松風の外に聳え、鐘樓は昔を說きて香雲の中に包まる。誦經の聲遠く響きて、鶯の歌高き梢にあり。かさなる岩根をふみしめて生立つ松、その間を點綴して咲きほこる花、嵐山の春こそ今たけなはなれ。小舟に乘りて漕行く人あり、



大悲閣　嵐山の半腹にある觀音堂

太秦　山城國葛野郡京都の西にある村

廣隆寺　聖德太子の開基で眞言宗の名刹

大和田建樹　文學者。明治四十三年歿、五十二歳

岸の此方にて眺むる人あり。かなたの坂を登りて、大悲閣に至れば、眼下にひろげらるゝ一幅の畫圖、柳櫻をこきまぜて、恰も西陣を織出せるが如く、また友禪を染めなせるが如し。途に太秦を過ぎて廣隆寺を訪ふ。夕陽しづかに鐘樓の瓦を染めて、春ものさびし。

暮色は東山をこめ、叡山をめぐり、やう〳〵鴨川に襲ひ來れり。清水の塔も半ば隱れぬ、大文字も姿をかくしぬ。紫に、紅に、藍に、墨に、見る〳〵いろどられゆく山影、うすく、青く、黑く、消されゆく人影、いづれ詩中のものならぬはなし。天地たゞ平和、四望たゞ寂寞、かへりみれば西山もなく、北山もあらず。

（大和田建樹―雪月花）

三　春の曲

うてや鼓の春の音
雪にうもるゝ冬の日の
悲しき夢はとざされて
世は春の日とかはりけり

ひけばこぞめの春霞
霞の幕をひきとぢて
花と花とを縫ふ絲は
けさ萌出でし青やなぎ

霞のまくを引きあけて
春をうかがふことなかれ
花咲きにほふかげをこそ
春のうてなといふべけれ

小蝶よ花にたはぶれて
優しき夢をみては舞ひ
醉うて羽袖もひら〳〵と
春のすがたをまひねかし

緑のはねのうぐひすよ

梅の花笠ぬひそへて
ゆめ靜なる春の日の
しらべをたかく歌へかし

（島崎藤村―藤村詩集）

島崎藤村
詩人。小說家

四　名人團平

團平
義太夫節の三味線彈。明治三十二年歿、年七十二

「御免なさりませ、團平の御師匠さんはこちらで」と、海松布のやうな着物を着た乞食が、或日初代豊澤團平が住居の格子先へ立つた。

「お何や。どなたかいらつしやつたやうだ、行つて御覽」と、女房は煙管を下に置きながら、長火鉢の前から聲を掛けて、臺所に立働いて居る女中を呼んだ。

女中は、濡れた手を前垂で拭きながら玄關に出た。さうして、右の手で襷を外しながら敷居際に手をついて、障子をあけて來訪の客を見上げた。

「ちよつと、その何でござります、お師匠樣にお目通りを、へいへい」と、蓬頭垢面の物乞は、揉手をしながら小腰を屈めた。

「あらつ。お前お貰ひぢやないか。おかみさん、お貰ひの癖に且那さんに……まあどうでせう」。

女中は頓狂に叫んだ。

「何です、騷々しい。どうしたといふの」と、女中の仰山な聲に釣られて女房も出て見た。

「このやうな服裝を致しまして、誠にはや何でござりますが、

どうぞ一生のお願ひでござりまするで……へい、お師匠様にちよつと。「そんなことは出來ません。早く往つて下さい。それに何用か知らんが、お師匠様もお留守です。さつさと往つて下さい。」と女房は顔をしかめた。

「そこをどうか、一生のお願ひでござりまするで。」と乞食はしつこく動きさうもない。

「何だ、騷々しい。」と、主人の團平は襖から身體半分を出して玄關を見た。

「あなた、まあどうでせう。お師匠様にお目にかゝりたいなんて、ほんとに厭なお貰ひですこと。」と、女房の聲には角があつた。

「なに、お客様か。」と、團平はやをら玄關口へ出ようとした。

「およしなさい、お貰ひですよ。」と、女房は良人の袖を控へた。

「なに、ちよつとお目にかゝりさへすれば、もうはや、この世に望もございませんで、へい。」と、格子先の聲にはうるみがあつた。

「一生のお願ひで、はゝあ。」と、團平はたまらず障子際に出てしまつた。

「へい、一生のお願ひでござりまする。」

團平はつと進んで、その海松布のやうな着物の珍客を見た。

さうして慌てたやうに、「これはようこそ御尊來。さあ〳〵どうぞ。」と、自身で格子をあけて、

「こらつ、何をぐづ〳〵してゐるんだ。お洗足でも持つて來んか。」と、女どもを叱つた。さうして、今更のやうに恐縮がる乞食を通して、無理に上座に据ゑた。女どもは唯あきれて物もいひ得なかつた。

「むさい風體で、誠にどうも相濟みませぬわけで、へい。」と、乞食は座に得堪へぬらしくもぢ〳〵してゐる。

「いや、どう致しまして。して御用は……。」と、團平は賓客に對する禮を崩さなかつた。

「實はその突然の儀にござりまするが、私は至つて義太夫の三味線を伺ふのが好きでござりまして、しかしまだその、何でござりまする、お師匠樣のを伺つたことがござりませぬで、それをば一生の願ひとはして居りましても、御覽のやうな、はや見る影もない態で、何ともどうも……。」と、きれ〴〵の言葉に境遇を恥ぢる素振は現れて居るが、その熱心の態度は眼の輝きにも知られて、さすが古今の名人の心を動かすに十分であつた。

「さうですか、それはまあようこそ。よろしい、彈きませう。どうぞゆつくり聽いて下さい。おい、お茶とお菓子、それからお煙草盆はどうした。いや、どうも失禮な奴ばかりで。」と、團平は次の間に立つて、三味線を抱へて來た。

「誠にはや有難いことでござりまして。」と、乞食は感に堪へて居る。調律の撥音にさへ、浪花の街の動搖は靜まつて、秋の

志度寺の段
「花の上野譽の石碑」といふ淨瑠璃の一節

午下りは夜半のやうだ。彈出したは、「志度寺のお辻の最期」その水際立つた絃の音には、富貴もなく、貧賤もなく、人もなく、我もなく、三味線もなく、撥もなく、唯鳴りに鳴る玄妙の音ばかり。乞食の頰には涙が滂沱と傳はつた。

乞食は欣然として辭し去つて、行く處を知らなかつた。

それを飽かず〳〵見送つた團平の眼にはうるみがあつた。その名人の眼のうるみこそ、知己に遇つた歡喜と、二度と會はれぬ別離の悲みとを語るものであつた。やがて室に歸つた團平は、藝人の妻としての不心得を責めて、離緣を申し渡したが、同輩・門弟等の詫でやうやく納まつたといふことである。その名人、今は天に歸つて、不思議の音締はもう耳

吐雲錄
和田垣謙三博士の隨筆集

日の岬
出雲大社の東北にある出雲山の西端が海に斗出したところ

にすることが出來ぬ。

あゝ、音樂の天才、天才の技倆は人と共に亡びてしまふ。併しこの美はしい話は永久に生命をもつであらう。

（吐雲錄による）

五　日の岬

私は舊日本の風光が好きです、人間が好きです、溫泉が好きです、食物が好きです。表の方では內海の景色と、それから鯛網でとれる鯛が好きですが、裏の方ではすべてが好きです。ことに山陰の風光は、出ぎらひな私に綱をつけて引張つてくれます。さして用も無いのに、三度までもあのどす

黑い煤煙だらけの汽車へ乘りこんで、日の岬の果まで出かけたのは、よく〳〵の憧れを持つからではありませんか。

私は、世の中に何が一番嫌ひなといつても、長いトンネルを汽車で通るほど嫌ひなことはありません。ひどい時は、大きな魔の手で胸を押へつけられたやうな苦みも感じます。それが大阪から倉吉まで、……哩數にしたら百二三十哩ほどの間に、七十六と、穿りも穿つたり、通りも通つたり、まるでトンネルばかりの間を駈けて居るやうなものですが、さしものトンネルが、山陰の道中ではあまり苦痛に感じません。

「おや、またお出でなすつたよ。」くらゐで平氣で居ます。その

倉吉　伯耆國東伯郡の町

またトンネルを出た所は、きつと明媚な風光があります。

古い譬ではあるが、苦のあとは樂のある浮世の狀態を見せて居るやうで、一種の感興を催します。

その樂が一寸の間で、また苦の世界へ進み入る。それが餘り早いので、全く頭痛を感じない譯には參りませんが、そこが、自分のずつと太古の先祖の故鄕であると思ふと、自然に懷かしさが浮んで來ます。乘つて居る汽車の上にも下にも、先祖の足跡が付いてゐるかと思ふと、一々お辭儀したくなります。私は子供の時から大國主命が好きです。「大黑樣といふ方は、一に俵を踏んまいて、二ににつこり笑つて。」と謠はせられた時から大好きです。それは俵を踏まへておお立ちになつた御樣子が、福々しくてよいからではありませ

ん。振上げた槌の中から無數の寶が出るからでもありません。私は自ら大黑樣の御家來であると信じて居るからであります。少くとも私のずつと〳〵昔の先祖は、大黑樣のお靴を捧げて、大黑樣が裏日本を御經營なさつたときのお供をした者であらうと思つてゐるからです。

それなら、も少し福の神の御蔭を受けさうなものだといふ人もあるか知れませんが、私はどんなに貧乏でも、三千年前の先祖は大黑樣の御家來であつたといふ事を、たとへ先祖から傳はつた鏃一つないにしろ、私の魂でちやんと承知して居ます。だからこそ出ぎらひの私が、山陰まで罷り出て、土の香をかぐのではありませんか。先祖が忠義もし、横着

伊那佐の濱　出雲國杵築町の海濱の舊名

少彦名命　大國主命を助けて國土を經營せられた神

武御雷神　經津主神　二神ともに天照大神の命を受け出雲に使して大國主命から國土を受取られた

もし、遊びもしたらうと思はれる所々の、昔からの面影にあこがれて、そこらを駈歩いたではありませんか。

その中で、一等私の心をそゝつたのは日の岬です。

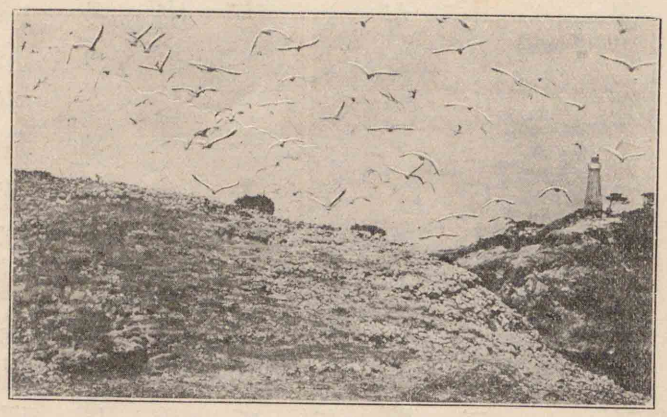
日の岬へは、伊那佐の濱から小舟に乘ります。海上三里ほどもありませう。少しでも風が吹くと、危險だといつて舟を出しませんから、運の惡い人は二日も三日も逗留して日和を待つことがあります。「これで三度來るが、一度も舟が出ない。」と泣顏して歸る人もあります。

伊那佐の濱は少彦名命が初めて潮に乘つて出て來られた處、武御雷神と經津主神とが、大國主命に國讓りの交渉をした處で、大黑樣には最も關係の深い土地、また日本國民にと

つては忘れることの出來ぬ靈跡です。私の先祖も大國主命が國を平げて、初めてこの濱へお出でになつて、御慰勞の酒宴をお開きなされた時、定めし大いに杯を上げたでせう。主命もだし難く、首にかけた出雲石の勾玉をかち〳〵といはせて、つまらぬ舞などをお目にかけもしたでせうが、この二神との國讓りの交渉には、どんなに心配したでせう。私はこゝの濱に立つて、朝日に凪ぎわたる海の景色に接した時ほど、爽快な、そして懷かしい、そして遣るせない思を感じたことはありません。

伊那佐の濱を出て、日の岬へ行く間には、一つ〳〵古い歴史と傳說とをもつた多くの岩が、渺茫たる波濤の間に見えかくれして、我々を迎へしてくれます。中にも武御雷神が、「ぐづ〳〵言つたら、この通り微塵にするぞ。」と威して、海中へ投げられたといふ千引の岩もあります。甲の縅を見るやうに、段々刻みになつた甲岩もあります。潮の色も藻の香りも、三千年前の姿をそのまゝに持つてゐるかと思ふと、自然に起る感激の涙が舷にかゝります。

鼻高山　出雲の大社の東北にある出雲山の一名



日の岬の群鷗

鼻高山を右手に見て、岩礁の間から舟路が變ると、そこに日

御碕神社　大社の西北一里半。日の岬にある神社

の岬の船附場が見えます。一面の老松、その上に無數の白い鷗が舞遊び、御碕神社の棟木が松の葉がくれに見えます。それを見ると、故郷へ歸つた時のやうな歡喜が、胸をついて出ました。向つて右手は茂つたまゝの竹垣で、それが右の方へ五六十間も延びてゐます。その垣は風を防ぐ爲でもあり、また波を防ぐ用にもなりませう。處々に四角の切穴があつて、そこから人間が出入します。

垣の中には、少くとも二三十戸の人家があるらしく、枯れて白くなつた笹葉の間から、家の棟が見えて居ます。白い炊烟が昇つて居ます。私は舟の舳が岬についた時、「三千年の昔をそのまゝに見せて居るのはこゝである」と思ひました。

渡邊霞亭　小說家

ずつと前の先祖の住んだ家は、この竹垣――ではない枯れた藪垣で圍はれた、かうした家であつたらうと思ひました。

（渡邊霞亭）

六　耳の趣味

一　野の曲

翠濃い丘陵の際に巨刹の屋根が見えて、揚雲雀の高く囀る日であつた。

川尻のせゝらぐ汀に、里の子が根芹を摘んでゐるいさゝ小川の土橋を渡つて、日の光もさゝない藪の中を出かゝると、十戸にも足らぬ草の屋が立並んで、野仕事の間の午下りが

朝の如く靜だ。

梨・杏などの木立を隔てゝ、直徑丈にも餘る水車が軋つてゐる。　山吹・木蓮の蔭から梭の響も傳へられる。　鷄が一聲のどかに啼渡ると、椿の花がぽとりと落ちる。　桃の蔭に牛が鳴く。　その間正しき拍子と按排よき旋律とを有つて、ひつそりした裡に趣ある曲が繰返される。　春の香の泌入るやうな嫩草にうづくまつて、しばしこの音に聽きとれる。

折から雷電の如き轟を殘して、汽車は土手の上を走る。　蜿蜒たる煙を吐いて轍の數がそれからそれと續く。　幽玄の曲は跡もなく破られてしまつた。

二　瀑の音

漱石　夏目金之助。文學者。大正五年歿、五十歳

瀑の音を現した句で自分の氣に入つてゐるのは、漱石の新俳句時代のので、

あら瀑や滿山の若葉皆振ふ

といふのだ。　これはいかにも瀑の音の雄大を目前に聽くやうで、一種積極的な感に打たれる句だ。　初袷を着た裾の輕い旅姿で、喘ぎ〳〵細い路でも上つて往くと、しつとりした若葉の匂が鼻に滿ちて來る。　だん〳〵汗ばんだ體軀も冷やりとするので、もう瀑の所に近づいたなと思ふと、どうつと雷のやうな音を連續させて、それが木立や岩の疎密の加減で強く聞えたり、また少し弱くなつたりして居るうちに、さと薄い霧が面を拂つて、つい數歩前に見上げる白簾が

現れ、巖に激する凄じい響で、其處らあたりの青葉若葉は搖ぐばかりに大きい音がしてゐる。

そこらの崖の上には赤いつゝじが照つてゐたり、また薄紅の八鹽の花が翠巒の中に、ぽつり〳〵と模樣のやうに咲いてゐる、といつたやうな光景を想ひ出す。

同じ瀑の音でも何處か閑寂な感じのするのは、彼の芭蕉翁の、

ほろ〳〵と山吹散るや瀧の音

といふ句だ。

春がやうやく長けて、山吹の花も瓣の端が白くなつて、風もないのにほろ〳〵と散ると、そこらに餘り大きくない瀧が

芭蕉　名は宗房。德川時代の有名な俳人。元祿七年歿、五十一歳

あつて、とう〳〵と響いてゐる。その裾には水車もあらう。また杉の林もあらう。日は麗かに照つて背中がほか〳〵するので、路傍の石に腰をかけてゐると、雉子が向ふの山際で一聲朗かに鳴く。するとまたしても山吹がほろ〳〵と散つて、瀧は同じ調子でとう〳〵と響いて居るといつたやうなことを聯想させる。

（鈴木鼓村―耳の趣味）

鈴木鼓村　音樂者。文人

七　心柄

心柄といふものは、ほんのちよつとした言葉のはしにもあらはれるものである。

私の居た寺の坊さんに、ある時、銚子行の川蒸氣の話が出た

私の居た寺　作者は此の時下總東葛飾郡市川町附近の眞間に滯在してゐた

銚子　下總國海上郡利根川口にある

をりに、

「此處から銚子まではよほどでせうね。」

と聞くと、

「いや、たいした賃錢でもありません。」

と答へた。私は里數を聞いたのに、坊さんは大變なことを答へたものである。坊さんはこの一言で、自己が俗僧であることを私に知らせてしまつた。

また、ある時、三人の男が膝を交へて坐つて居た。その時女中が、バナナを山ほどお盆に盛上げて持つて來た。そのバナナはまだ青かつた。これを見た瞬間に、一人が、

「はあ、いゝな。」

といつた。一人は、

「駄目ぢやないか、青いな。」

といつた。一人は、

「全く小笠原のは値ばかり高くてね。」

といつた。三人とも親しい友だちだつたが、一人は畫家で、一人は商人、あとの一人はそのコーヒー店の主人だつた。畫家はその時、色のかゞやきを見た。商人は味を感じた。そしてその店の主人は値を考へて、一緒にハツと思つたのである。この中の誰の心が、一番尊く磨かれてゐたか。またかういふ事があつた。

ある歌自慢の人が眞間にたづねて來て、私に「歌を見てくれ。

といつた。大概かういふ人の「見てくれ」は「教へてくれ」といふのではない。「驚いてくれ、褒めてくれ」といふのである。私にはさういふ人の心持はよくわかつてゐる。「かういふのはいけないのだ」といつた處で、わからう筈はなし、先方にほんとに教はりたいと謙つた心が無い以上、私の方でもむきになつてやりこめる必要はない。

そこで私は、その人もさういふ人だと直ぐに見てとつたので、「まあ、散歩でもしてみよう」と一緒に外に連れだした。歌の自慢などきくより、外へ出て雲でも見た方が、どれだけせいせいするか知れない。どうせ時間をつぶすなら、その方がよい。その人は、途々何かしやべつてゐたが、私は夕方の

空や、田園の景色にばかり眺め入つて居たのである。まだ赤い夕焼が西の空には殘つてゐた。眞間の小川の堤の上を歩いて行くと、ふとその人がしやがんで小石を拾つた。何をするのかと見ると――何といふ可憐な繪模樣であつたらう。私は思はず立止つてしまつた。

そこには、鮮かな裏白の葉の河楊が、水の面に搖れてゐた。その撓んで搖れてゐる一つの枝には、まだ小さな燕の子が一羽留つて居た。又一羽來た。枝はいよ〳〵搖れる。枝の先は水へついて波を立てて居る。燕の子たちは、紅い頰を揃へて、さも〳〵恐ろしさうに啼きたてる。又一羽留ると、枝はいよ〳〵搖れだした。ともすると滑り落ちさうに

なるので、今は必死となつて縋りついて居る。そのつやつやしい黒い裂羽、いたゝしげな鳴聲。それだけでも可愛いゝのに、また一羽、羽ばたいて、つい近くまではやつて來るが、枝の上の燕の子はそれを見て、慌てて「いけない、いけない。」と鳴く。これ以上留つては、枝がすつかり水につかつてしまふのである。空の一羽は、とまるには留れず、寂しさうに鳴きながら、翔つては近より、近よつてはまた翔り出す。その燕に向つて、小石を投げたのである。私ははつとしたが、それでも默つてゐた。寂しい氣持でほほ笑みながら、私は何氣なく歩を續けた。さうしてある所までその人を送つて行つてから、

北原白秋
現代の詩人

「左樣なら。またお出でなさい。」と別れた。歌はとう〳〵見なかつた。見なくとも、もうどれだけの歌か分つてしまつた。

何故か。

それはこの一事で、その人の心柄がまだ出來てゐないといふことが、はつきり私にわかつてしまつたからである。「心」ができなければ、歌はできない。

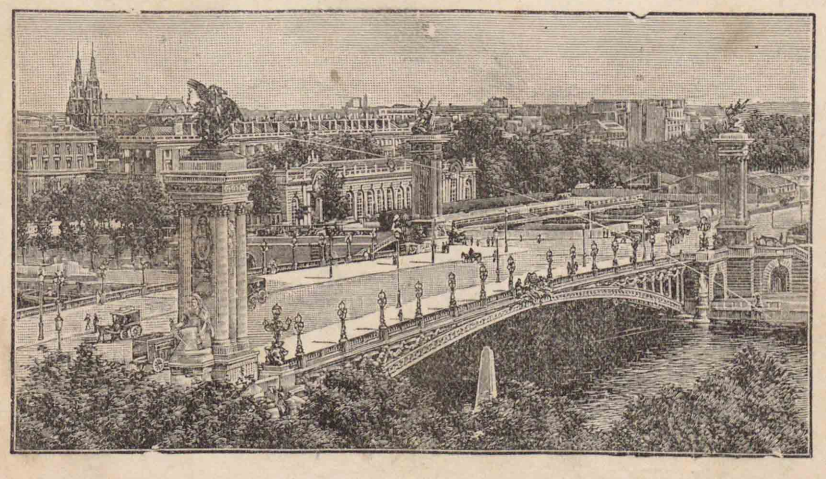
（北原白秋―洗心雜話）

八　パリの五月

山羊の乳を賣りに來る男が、朝早く此の町を通ります。幾頭かの山羊を引連れながら、面白をかしく笛を吹いて來る

ので、呼留めて買はうとするものがあれば、すぐ其の家の前で新鮮な乳を搾つてくれるのです。今朝も私は山羊の乳賣の笛に眼を覺しました。夢のやうに寢床の中で耳を澄ますと、遠い牧場の方からでも、若草を吹く五月の風が、ときれ〳〵に持つて來るやうな笛の音が、まだ朝のうちの玻璃窓へ傳つて來て、何かかう、自分等の心の底

パリのアレキサンダー橋



に眠つて居るものを誘ひ出すやうな心地が致します。故郷で飴屋の吹いて來る唐人笛を聞きますと、二度とは自分等の生涯に來ない少年時代の方へ、心を誘はれるやうな氣が致しますが、この山羊の乳賣の笛の調子が、何となくあの唐人笛に似て居ります。今少し澄んだ柔かな音です。パリのやうな大きな都市の空氣中にも、かうした牧歌的な情調を傳へる細い幽かなメロディが流れて居るかと、珍しく思ひました。

只今は當地でも最も樂しい時です。輝いた日光は窓の外にあります。櫻の花があわただしく散つて、若葉に變つて行くやうな趣は當地には見られませんが、でも春の過ぎて

行くといふ心地が、私の胸に深く浮んで參ります。日に日に茂つて行くプラターナスの並木の若葉が、少し萎れて見える時、其の葉の間に日光の滿ちた時、五月らしい雨が來て、柔な新緑の活きかへる時、私はまた遠い空の彼方に、曾て信濃の山の上で望んだとおなじやうな、白い綿のやうな暮春の雲を見つけます。それが微風に吹かれて、絶えず形をかへるのを望みます。長い黄昏時がまたやつて來るやうになりました。恐らくこの黄昏時は、暮れさうで暮れない町の空氣の紫色と共に、もつと〳〵長く續くやうになるでせう。そして極短かつた冬の日とちやうど反對に、一晝夜の大部分を晝のやうに明るくしてしまふでせう。

地帶から言つて、當地が北海道あたりに近いことは、鈴蘭の花で思ひあたります。此の花が信濃の山の上でも採集されるのは、やはり北海道あたりと氣候を同じくするからでせう。五月の一日には當地の町々で、小さな花束にした鈴蘭を賣ります。それを幸福の象徴として、胸のあたりに挿して行く男女を見掛けます。

（島崎藤村―平和の巴里）

九　蜂が團子をこしらへる話

宅の庭の植物は、毎年いろ〳〵な害蟲の爲にむごたらしく虐待される。中でも一番ひどくやられるのは薔薇である。羽が黑くて腰の黄色い小さな蜂が、柔い若芽の莖の中に卵

を産みつけると、やがて莖の横腹が竪にはじけて青い色の幼蟲が生れ出る。これが若葉の緑に鈴なりに黑い頭を並べて、驚くべき食慾をもつて、瞬く間にあらゆる葉を食ひ盡してしまふ。去年は、この翡翠の色をした薔薇の蟲と同種と思はれるのが、つゝじにまでも蔓延した。尤もつゝじのは、色が少し黑ずんで居て、つゝじの葉によく似た色をして居るのが不思議であつた。何とかしてこの害蟲を絶滅する方法はないものだらうかと思ふだけで、專門家に聞いて見るでもなく、書物を調べるでもなく、ついその儘にして置くのである。いつか三越の六階で薔薇を見て居たら、それにも、ちやんとこの蟲がついた儘に、正札をつけてあるのを發見して驚いた事がある。專門家でもこれを完全に驅除するのは困難だとすると、自分等の手におへぬのは當然かと思はれた。兎に角去年などは、幾株かの薔薇とつゝじを綺麗に坊主にしてしまはれた。枯れるかと思つたら存外枯れもしないで、今年の春の日光を受けると、又正直に若芽を吹出して來た。

今年も亦例の青蟲が出るだらうと思つて、折々氣をつけて見るが、どうしたのか、まだ餘り多くは發生しない。その代り今年は、これと變つた蟲が非常にたくさん現はれて來た。それは黑い背筋の上に薄いレモン色の房々とした毛束を四つも着け、その兩脇に走る美しい橙紅色の線が、頭の端で

燃えるやうな朱の色をして、そこから眞黑な長い毛が突出して居る。これが薔薇のみならず、萩にも、どうだんにも、芙蓉にも、夥しくついて居る。これは青蟲ほど旺盛な食慾をもつて居ないらしいが、その代り、いはゞ少し口のおごつた奴で、薔薇の莟を選んでは、片はしから食つて行くのである。去年はよく咲いたクリーム色の薔薇も、今年はこの蟲にひどく荒されてしまつた。或日私は庭へ出て、一番毛蟲の多くついた薔薇を見に行つた。そして見當り次第に箸でつまんで處分して居た。すると、眞圓く擴がつた薔薇の枝の上に、土色をしたとかげが一疋横はつて居た。ぢつとして所謂甲らを干して居るといふ樣子であつた。併し恐らく

そんな生溫い享樂のためではなくて、もつとせつぱつまつた生存の權利を主張するために、何かを期待して狙つて居たに相違ない。時々のそ〳〵這ひだしては、又ぢつとして、意地のわるさうな眼を光らせて居る。事によると、これは青蟲でも搜して居るのではないかと思はれた。若しさうだとすると有難いわけだと思つた。

忽ち眼の前に一つの爭鬪の活劇が起つた。同じ薔薇の上に何物かを物色して居た濃褐色の蜂が、突然、殆ど何の理由とも分らず、又何等の豫備行爲もなく、いきなりこのとかげの背に飛びかゝつた。そして右の後脚の附根と思ふ邊を刺したやうに見えた。併しとかげは殆ど何事も起らなか

つたかのやうに、ぢつとしたまゝ、身じろぎ一つしなかつた。そして數秒の後に、又のそ〳〵と這ひだして、一寸ぐらゐも這つたかと思ふと立止つて、小さな眼を光らせて居た。どういふわけで蜂がこのやうな攻撃をしたか、私には少しも見當がつかなかつた。人間ならば商賣敵といふ言葉で、容易に説明されるべき行爲の動機が、この場合、同じ言葉で説明されるかどうか、それは全く分らない。

同じ薔薇の反對の側へ廻つて見ると、そこにも一疋の蜂が居た。そして何かしら或仕事をして居るのであつた。それはさつきとかげを攻撃したと同じ蜂かどうか分らないが、とにかく同じ種類のものであつた。廣い葉の上に止つて、前脚で小さな毛蟲らしいものをしつかりつかまへて、それをあの鋭い鋏のやうな嘴でしきりに嚙みこなして居た。私が見つけた時には、それがもう殆ど毛蟲だか何だか分からないやうな塊になつて居たが、唯そのまはりから突出した毛束によつて、さう考へられたのである。斷えず嚙みながら脚で器用に塊をまはして行くので、初には多少いびつであつたのが、殆ど完全な球形になつて、もう何處にも毛などの痕跡は見えなくなつてしまつた。廻す拍子に一度危く取落さうとして、やつと取止めた樣子は滑稽であつた。

蜂はやがてこの團子をくはへて飛出さうとしたが、どうしたのか、もう一ぺん他の枝に下りた。人間ならば、ざつと荷

物をこしらへて、試みに一寸さげて見たといふやうな體裁であつた。そして又暫く嚙んで丸める動作を繰返して居た。からだで拍子をとるやうにして小枝をゆさぶりながら、せつせと働いて居る處は、見るも勇しい健氣なものであつた。澁色をした小さな身體が、精悍の氣ではち切れさうに見えた。二三分もすると急に飛上つて、一文字に、投げるやうに、隣家の屋根をすれ〳〵に越して見えなくなつてしまつた。私は毛蟲にかういふ强敵のある事は全く知らなかつたので、この目前の出來事から、かなり强い印象を受けた。そして今更のやうに、自然界に行はれて居る「調節」の、複雜で巧妙な事を考へさせられた。

それから二三日經つて、同じ薔薇で、同じやうな蜂が大きな毛蟲を捕へる處を見る事が出來た。いきなり頭の方へ嚙みつくと、皮が破れて綠色の汁が玉のやうに吹出した。それを引きずり引きずり、高い葉へ高い葉へと登つて行つた。その間にも嚙みこなす事は休まず續けて居るので、毛蟲の形はだん〳〵に消えて、綠がかつた黑色の塊に變りつゝあつた。そのうちに一度、蜂は羽をひろげて强く振動させた。恐らく飛上らうとしたのであらうが、蟲の重量はこの蜂の飛揚力以上であつたと見えて、少しも動かなかつた。どうするかと思つて居ると、その稍長みのある塊をうまく二つに食ひきつて、その片方を丁寧に丸めた後に、それをくはへ

て前日と同じ方向へ飛んで行つた。殘の半分を今に取りに來るのではあるまいかと思つたので、ものの十分ほども待つて居た。その間に全く別の方向から同じやうな蜂が飛んで來て、薔薇の上を暫くあさつて居たが、さつきの團子の殘の半分のつい近くまで行つても氣付かないで、そのうちどこかへ飛んで行つてしまつた。一二時間もたつて見に行つた時には、毛蟲の半分の塊はもうなくなつて居た。それは何者が持去つたかよくはわからない。しかし多くの蜂について、從來知られて居る事實から推して、この殘の半分も、それの正當な權利者の巣に運ばれたものと思つてもいゝだらう。私はこの蜂の巣を見付けたい、そしてこの珍奇な蟲の團子が、そこで如何に處理されるかを知りたいと思つて居る。

（吉村冬彦―冬彦集）

吉村冬彦　本名は寺田寅彦。東京帝國大學教授、理學博士

一〇　屋上の一夜

一昨夜も蒸暑くして寢苦しかりき。昨夜も然りき。今夜も亦かと思へば、住みなれし我が家も火宅に異ならず。さはいへ、避暑とは意氣地なき次第なり。我年來、殊に夏期好んで旅行すれども、これ暑を避けんとするにあらず、俗累を脱して、思ふやうに讀書若しくは執筆せんとするなり。溫泉若しくは海水に浴して、心身を健全にせんとするなり。名山・大川を跋渉して氣を養はんとするなり。史跡を探ら

んとするなり。自然美を樂しまんとするなり。と、氣張つては見たれど、もと〳〵凡夫の身、やはり暑きよりは涼しきが氣持よし。晩食の後、屋上なる物干臺の上に涼を取りけるが、ふとこゝに一夜を過して見ばやと思ひつきたり。「夏の夜は蚊を疵にして五百兩」と詠じけん、屋上も又蚊軍の來襲を免れず。蚊帳を持來りて四方の柱に釣り、蒲團敷きて臥す。三男も俱にす。上弦の月西天に在り。南風稍〻強くして蚊帳の裾揚がる。石を置きて之を鎭す。涼しき風も、蚊帳の中にはその三分の一も入來らず。明かなる月も、蚊帳の中にてはそれとも見えわかず。蚊帳の外に出づれば、清風明月えも言はれぬ心持なるも、いつしか蚊來りてさす。

また蚊帳の中に入る。十時を報ずる時計の音聞えて、間もなく西隣の家は雨戸を締めたり。しばらくして北隣の家も雨戸を締めたり。余の寢入りしはそれより幾分の後なりけん。ふと目覺むれば、月は既に落ちたり。星稀にして雲頻りに動く。風も絶えたり。屋内に入りて時計を見しに十二時半なりき。遙かに聞ゆる汽車の音を最後にして、人間の活動は全く絶ゆ。四邊人籟なくして、天茫々たり、地漠々たり。唯をり〳〵五位鷺の聲を聞く。その五位鷺、すべてみな言合はせたるやうに、東北より來りて西南に去る。眞夜中は鳥の活動する時なるかと思ふほどに、はや鷄の鳴くを聞く。この次に鳴

くものは何なるかと耳を欹てしに、凡そ二時間も經ちしと覺しき頃、蜩の鳴くを聞きぬ。この次は何かと待ちかまへしに、思ひがけずも鶯の谷渡を聞きぬ。都や戀しき、山や憂き、夏は山ならでは鶯を聞くに由なきこととばかり思ひ居たりき。今こゝに始めて夏の最中、都にて鶯を聞くにつけても、物事は妄に斷定を下すべからざるものと思ひぬ。この次はと待ちしに鳥なりき。その次は雀なりき。かゝるほどに、空漸く白みて、がら〳〵と牛乳配達が箱車を挽來るを聞く。人間の活動こゝに始まらんとするなり。空を飛びゆく五位鷺は別にして、人間に先んずる鳥の活動は鷄が魁にして、雀が殿なりき。三男は熟睡して、鷄の聲も、蜩の聲も、鶯の聲も、鳥の聲も、雀の聲も、一切知らぬ樣子なり。牛乳配達の車の音を聞くころになりて、余はまた寢入りしが、幾時間眠りけむ。目を開きし時は、寢て居る〳〵とて、稚兒が笑ひ興じ居たりき。稚兒は昨夜早く眠りて、今朝になりて、始めて余等の屋上に臥したることを知りたるなり。屋上露臥の味を覺えたりけん。翌夜三男は長男・次男・義甥と共に、再び屋上に眠りたりき。避暑を嘲りながら屋上に避暑す。人或は五十歩百歩と笑はん。

（大町桂月―冷汗記）

大町桂月　名は芳衛。文章家。大正十四年歿。年五十七

某の島　ベル島といふ要塞島

一一　燈臺守

フランスの西岸に近き某の島に燈臺あり、マトローといふ

ものこれを守りぬ。

或日マトローは燈臺に上りて、常の如く掃除をなし居たりしが、俄かに重き病差起り、掃除半ばにしてその室に下り、そのまゝ床に就けり。マトローの妻は心を竭して夫を看護せしが、病些かもおこたらず、氣息奄々として死期の遠からざるを覺えぬ。醫藥効を見ず、賴むところは唯神のみ。妻はひたすら神に祈りぬ。

とかくする程に夕暮は迫りぬ、黃昏の色は漸く海を蔽ひぬ。病の床は離るべからず、床を離るれば瀕死の夫を如何にせん。燈臺の燈は點ぜざるべからず、燈を點ぜずば夜の船路のしるべを如何にせん。夕暮は益深くなりぬ、黃昏は海を

蔽ひかくしぬ。「吾等の務なり、吾等の務なり、務は曠しうすべからず。」妻はかく思ひ定めぬ。かくて夫の病床を後に、心ひかるゝ身を起して、妻は燈臺に上りぬ。

燈は明かに海上の闇を照せり。夜の船路のしるべとして、今宵も明かに海上の闇を照せり。

妻は急ぎて夫の室に歸り、氣づかはしき瞳を病の床に注ぎぬ。あはれ、妻は何事をか見し、最後の息は、この時絶えて、冷たき脣は見る〳〵色を變じゆけるなりき。妻は顏を掩ひて、心ゆくばかり泣きぬ。

をりしも一人の兒驅け來りて、燈臺の燈の回轉せざるよしを告げぬ。この燈臺は回轉式のものなるを、マトローの掃

除中、機をはづしたるまゝ下りければ、さてはかく回轉せざるなりけり。

若し捨置かば、出入の船の見誤りて如何なる椿事もや起らん、捨置くべきにあらずと、妻は夫の骸を守りもあへず、直ちに臺にいたりて機を裝置せんとせしが、幾度試みても機は外れて、依然として回轉せず。今はせん術なくて、十歳を上なる二人の兒を呼び、その小さき手もて、夜もすがら、燈を回轉せしめぬ。燈は回轉しつゝ、海上の闇を照せり。夜の船路のしるべとして、今宵も回轉しつゝ、海上の闇を照らせり。

悲しき一夜はかくて明けぬ。この夜安全に島邊を航せし船は、たゞ常の如く明かに、常の如く回轉せるこの燈臺の燈を望みて、健氣なる妻と子との心づくしの如何ばかりなりしかを想はざりしなるべし。何ぞ知らん、明かなる燈光は、これ悲しき妻の眞心の光にして、回轉せる燈影は、これいぢらしき兒等の、夜の目も合せず務めたる丹誠の働なりしことを。

この夜のことは、後に至りて傳へられ、世人は擧りてこの健氣なる行爲を賞揚し、幾多の新聞社はこの誠意公に奉じたる母子のために義金を募りぬ。

あゝ、ありし一夜の燈は、如何に清き光を放ちて、島邊の闇き波の上に、影美しく輝きけん。

（藤井乙男）

藤井乙男　文學博士。京都帝國大學教授。國文學者

一二　一燈錢

同社中　松下塾の塾生等をいふ

此の度同社中申しあはせ、自分々々の力を盡し、骨を折りて、瑣細の事ながらも相儲け置きたき事に候。　非常の變、不意の急にさし懸り候はんにも、嚢中拂底にては差支ふるものに候。　有志の人の、牢獄に繫がれ、又は飢渴に迫り候ものも、おひ〳〵相助けたく、義士節婦の碑を立て墓を築く等にも力を盡し、手を伸ばしたき事に候へども、同社中、有餘の金もあるまじき事に候へば、毎月寫本なりともして僅かの貯蓄致し置きたく、月末松下塾まで、銘々持寄り致すべく候。　半年にもせよ、一年にもせよ、「塵もつもれば山となる」理にて、きつと他日の用に相立つべく考へられ候。　尤も、同社中、身の

松下塾　長門國萩の東郊松本村にある吉田松陰の塾

膏を搾りだして集むる事なれば、迂闊に費すべきにあらず、已むを得ざることあらば、同社中申しあはせの上にて、取揃へ申すべく候。　抑、人を救ふも、用に備ふるも、富貴・長者の身ならば、なほ如何樣にも相計ふべけれど、我々にては、かくまでにするは「貧者の一燈」とも申すべき事に候。　至誠の貫かぬ理はよもあるまじく候。　これに依つて、この度取立て候金を、一燈錢とは名付くるにて候。

一、毎月、寫本六十枚づつ村塾まで必ず持寄るべく候事。

一、寫本料は、先師の定むる所、眞字十行二十字五文、片假名同斷四文の事。

一、一日、僅かに二枚づつの事なれば、さまで勉强のならぬ

貧者の一燈　昔王と貧女とあつた。王は佛に萬燈を供し、貧女は一燈を供した。王の萬燈は風のために消えつ、貧女の一燈のみは消えなかつた、佛經に見える故事

先師　吉田松陰。萩侯の臣で、幕末憂國の士

事はあるまじ。もし、この枚數不足の時は、代を以て相償ひ、必ず持寄り、これあるべき事。

右の條々、この度申しあはせ候。これ式のことに、骨を惜しみ候程にては、我々の至誠つらぬき候ことも覺束なく候やう相考へられ候。銘々きつと怠らぬやう致したき事は、申すもおろかに候。以上。

（久阪義助）

久阪義助　長州藩士。幕末の勤王家。元治元年蛤門の戰に自殺、二十六歳

一三　松下村塾

秋の日はもう暮れるに間はない。茶一つ飲むと、すぐ車を命じて宿を出る。車は町を東にぬけて、松本川の松本大橋を渡る。かなり長い橋だ。上流山聳え、下流海に開く夕川の景が好い。橋を渡ると、橋詰に大きな松が、川の方へ向いて高く秀でて居る。それをさながらの標にして、町ともつかず村ともつかぬ人家の集團、これが松本村（マツモトムラ）であつた。松下村（シヤウカソン）は松陰さんが松本村を雅化したのである。縣社の石標、石鳥居、石燈籠の立つ松陰神社に詣でる。拜殿前の横手に、長い撞木形の杵をあげたまゝの米春臺が、屋根下に保存されて居る。說明書を讀めば、松陰先生が、門生と史記・左傳など會讀しながら米を春いたものなのだ。

松下村塾は、淺い鍵形に二棟並んだ平家づくりの、見すぼらしい瓦葺。松下村塾の大きな標札がかゝつて、戸も窓もしまつて居る。番のおかみに賴んで開けてもらふ。戸口か

町　長門國阿部郡萩町

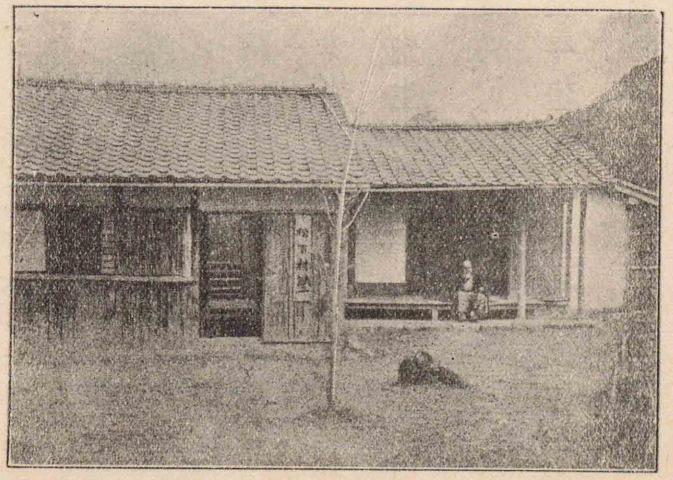
松本川　萩町の東部を流れる萩川の支流

松本村　萩町の東

史記　漢司馬遷が著はした支那古代から漢代までの歷史

左傳　孔子の著春秋に左丘明が解說したもの

ら入つて、もう黄昏の薄明りしか殘つて居らぬ室内を、其處此處と見て廻る。概して昔の儘であらう。あたりがうるさくなると、松陰先生は其處に上つて讀書したといふ二階、いや二階は過ぎる天井裏がある。それから血氣盛の若殿原が意氣を見せて、柱なんどはさんざんに手負うて居る。中に「殺身成仁」と深々と小刀か小柄の尖で彫りこんだのが眼を惹いた。誰のすさびであらう。久



晋作　高杉氏。慶應二年歿、二十九歳

彌次　舊長州藩士。品川彌次郎。明治三十三年歿、五十六歳

野村　舊長州藩士。名は靖。明治四十二年歿、六十八歳

杉民治　松陰のすぐ兄で、杉百合助常道の子

阪か、晋作か、彌次か、そも〳〵現に表にかゝつて居る松下村塾の標札の筆者といふ野村か、はた別人か。松下村塾の眞精神が、ある日ある人の手すさびに、深々と刻みつけられた此の四文字に、あり〳〵と示されて居る。

拜殿の後に連接した倉庫の二階に上つて見る。松陰手澤の書卷・刀劍・持物及びさま〴〵の筆跡などが、夕暮の覺束ない明りの中に數多積列べてある。ゆる〳〵見たら面白いものが多からう。暮色に促されて二階を下る。

すぐ後の屋敷は松陰の實家杉氏の住居ださうな。松陰の實兄杉民治翁も、數年前まで生きて居られたさうで、松下村塾の緣側に、羽織・袴で腰かけた、髯の白い、人の好ささうな老

翁の繪葉書など見た事がある。今誰が住んで居られるのか、ゆかしく思はれた。夕霧のかゝつた後の山の方から、ぼーんと晩鐘が響いて、淋しい松本の村にぽつ〳〵灯がつき出した。伊藤さんの舊宅は見ず、ほの白い松本川の橋を渡つて宿に歸る。

（徳富健次郎―死の蔭に）

伊藤さん　伊藤博文

徳富健次郎　小説家、蘇峯の弟

一四　山田長政

府中　今の靜岡市

駿州府中の大商人、戸田喜左衞門・太田次郎左衞門の持船怪神丸が、裾野を煽る野の風に帆綱を調べ、貝殻光る春の磯に舟子の唄もゆら〳〵と、駿河灣を乘出してから三日目の晝、水脈（ミヲ）も靜に海若の夢も亂れず、命知らずの舟子たちも、日本晴の極樂と車座になつて、午餉の飯櫃を持廻る眞最中、突然のこ〳〵と船底から這出した屈竟の武士があつた。

「やあ、貴殿は、府中で同船を御斷りした御武家ぢやな。何として今日まで。何處に隱れて來られた」。

商人ながら骨のある喜左衞門は、脇差を引付け屹と睨んで片膝立てた。一同の者も鐵の腕を叩いて、いざといはゞ飛びかゝらん氣勢を示した。が、武家はびくともせぬ。太く濃い眉の下から、刮と見開いた兩眼に笑を見せて、

「おうさ、この船で臺灣まで同行を賴んだがきいてくれぬ。よつて密に船底に潜んでごろりと寢たが、船も大分沖へ出た樣子ぢやから起きて參つた。俺も同じ日本の者ぢ

や。交誼があらばこのまゝ渡海の仲間に入れて貰ひたい。否とあれば致し方がない。波を歩いて戻りもなるまい。この大劔に物言はせう」。

と、下緒を扱いて褌に取り、刀の鯉口ぷつりと切つて隙もなく身構へた。喜左衞門も次郎左衞門も身を退つた。舟子どもの顔色も蒼くなつた。

「あゝ、海上の晴れたは又格別。ぢやが飲まず食はずの寝通しで、大分空腹になつた。御無禮ぢやが馳走にならう」。

武家はどさりと船板に胡座をかいて、手近にあつた大盃を取上げると、喜左衞門は頼もしげに進み寄つて酌をしながら、

「お若いに似ず立派な膽力、ひたすら感じ入りました。如何にも臺灣まで御送り致しませう」。

と、俄かに變る上々機嫌、武家も厚く好意を謝し、潮に吹かる手枕に、船子の歌を聞きながら、波路に愉快な日數を重ねて、遂に志す臺灣に着いた。

山田長政

この武家こそは誰あらう、山田仁左衞門長政である。

彼は駿河の片田舍に生れ、父が渡世の業にする紺屋の干場に、竹馬を乘廻す頃から武藝を好み、二里三里の遠き在所へ、竹刀かついでの道場がよひ

を此の上なき樂みとして居た。父母も初は將來を案じもしたが、亂世の習はしとて、鍔ぜり合ひに一城一國の受渡しも出來る世の中、强ひて兩腕を藍瓶に染めさせるでもあるまいと、爲すが儘に任せて置いた。長ずるに及んで、天晴れ一廉の劍客として天下を濶歩するだけの腕前になつたので、彼は伊勢の祠官に據つて長政といふ名を貰ひ、父亡き後は武者草鞋、飄々として故鄕の空を立出でたが、或日府中の宿に泊つて、隣の室に語り合ふ客の噂をよい手蔓と、臺灣通ひの商船に身を托し、奇策を用ひて首尾よく目的地へ渡つたのである。

百尺の竹、十丈の棕櫚、見る眼新しき蠻界の風物は、長政に取つて好個會心の活舞臺であつた。彼は豪刀を楯に、單身蠻界を征服して武名を擧げ、日本から渡來する船主の間にも鬼神の如く崇められて居た。當時日本は德川家康の掌中に國權を揑ねかへされ、野火の燒跡茫々たる有樣であつたから、外國との交通貿易の取締までは手が屆かぬ。この機會に乘じて、大阪或は泉州筋の寬濶なる船主は、死裝束の船頭に金花を撒散らして、冒險的な航海を企て、臺灣から暹羅南洋一帶へかけて、自由に貿易を行つて居た。臺灣に於ける長政の威名は、これ等の船の便りに依つて、雷の如く暹羅にまで轟き渡つた。

これより先、大阪落城に前後して難を遁れた豊臣の家臣は、

關東家康の配下に附くを嫌つて暹羅に落延び、國王より椰子茂る廣漠たる一部落を貰ひ受け、茲に傳來の具足を脱ぎ、田圃を拓いて日本町の一區劃を建設した。この日本町の住民どもは、長政の高名を慕ふの餘り、懇ろなる禮を盡して長政を迎へた。長政は快諾して暹羅に乘込み、日本村の首領となつたが、其の後暹羅國王の依頼を受けて叛賊を平げ、續いて敵國六昆（リゴール）を征服し、遂に其の國王となつて不朽の英名を海外に輝かした。

（平井晩村「歴史物語血吹雪」による）

六昆　今の馬來半島中にあるリゴール町附近の地

平井晩村　文學者

一五　達磨の話

數年前に東海岸のある漁村で、私は樂しい一夏を送つた。

そこには宿屋が無かつたので、私はある魚屋の二階を借りたが、そこの主人の乙吉は氣立のよい男で、毎日不思議なほどいろ〳〵に變つた魚を料理して、私に御馳走してくれた。ある朝のこと、乙吉が店で呼んで居る。降りて見ると大きな鮒（ハウ）鰒（ボウ）を料理するところだ。あまり不思議な恰好をしてゐるので、

「それが食べられますか。」

と私は尋ねた。乙吉は、

「へい、これを料理して差上げます。」

と答へた。乙吉はどんな問にも「へい」といふ深切と好意の籠つてゐる調子の語で答へるので、尋ねたものは忽ちに快

い氣持でその答を聞いた。

それから私は、その店に出て見た。種々の物がある。一方には棚が何段となくあつて、乾魚や切昆布の包や、草鞋と草履の束や、酒德利や、ラムネの瓶までが載つてゐる。さうして反對の側には、ずつと上に神棚があつて、その下には、達磨の載つた小さい棚がある。確にその達磨は玩具のでは無かつた。前にはちやんと供物があつた。しかし私は、達磨が家の神樣となつてゐるのに驚かなかつた。日本では疱瘡にかゝつて居る子供のために、達磨に祈ることのあるのを私は知つて居た。

けれども、乙吉の達磨が特別の物であるので、非常に驚いた。

その達磨は眼が一つしか無かつたからである。彼は大きな恐ろしい一つ眼で、梟のやうに薄暗い店中を睨みまはしてゐた。それは右の眼で、左の眼は白かつた。

「乙吉さん、あれはどうしたのです。子供たちが左の眼をとつたのですか」。

「へい、へい」。

乙吉は俎板へ生々した大きな鰹をとり上げながら、氣の毒さうな顏でにつこりとした。

「初めから、あの左の眼は御座いません」。

「ほう。そんな風に出來てゐるのですか」。

「へい」。

とまた乙吉が答へた。その時、柄の細長い庖丁が、銀白の鰹の腹を音もさせずにすうつと通りぬけた。

「こちらでは盲目の達磨ばかり作ります。私があの達磨を買ひました時には、眼玉は御座いませんでした。去年大漁でしたので、あの右の眼を作つてやつたのです」。

私は餘り不思議なので、

「ではなぜ兩方の眼をつけてあげないのです」。

と尋ねると、乙吉は又につこりと笑つた。

「ね、一つぢや氣の毒ぢやないですか」。

「へい、へい」。

手際よく桃色の肉と、銀色の肉の薄い一枚々々を硝子の簾

の上に並べながら、乙吉は答へた。

「また運の良い時がありましたら、その左の眼も入れてやりませう」。

一枚の皿に美しいお刺身の料理が出來た。

それから私は一軒々々、村の家の店や座敷を覗きこみながら通りを廻つたが、そこで私は種々と變つてゆきつゝある達磨を澤山見付けた。兩眼の無いのもあり、片眼しか無いのもあり、二つあるのもあつた。それにつけて出雲の國では、この幸運に對する感謝を布袋に對してすることを思ひ出した。出雲の人々は、何か感謝することのある場合には、安樂に袋にもたれた布袋の像が、柔かな蒲團の上に置かれ

る。そして授かる恩惠が增すごとに、一つづゝ蒲團の數が增してゆく。しかし達磨では二つ以上眼をつけられないことに氣が付いて聞いて見ると、二つの眼と、いろ〳〵の供物が供へられると、その達磨は眼の無い後繼者に席を讓つて片附けられるといふ事である。

日本にはこんな面白い小さい神が澤山ある。そしてこの不思議な小さい神を禮拜する人たちは、大概感心するほどに正直だといふことを發見した。實際私自身の經驗では、神が質朴であるほど、人も益〻正直であると信ずることは、正しいと思ふものである。

私がこの村を去る前の晩に、乙吉は二ケ月分の宿料の書附

を持つて來た。その勘定は無茶に安いものであつた。無論日本の習慣として、茶代といふものが拂はれるとしても、その書附は途方も無く正直なものであつた。私は乙吉の好意の深い待遇を有難く思つてゐることを現はすために、その書附の要求額を二倍にすることが當然と思つた。そして、その二倍にされた金を手にした乙吉の滿足は、全く自然で、又同時にしかつめらしい美しいものであつた。私は翌朝、早い急行列車にのるために、三時半に起きて着換をした。しかしこの早い時刻でも、溫い朝食が階下で私を待つて居て、乙吉の娘の、小さい、色の黑い女の子が、お給仕の用意をしてゐた。……で食事を濟まして、最後の溫い茶の一杯を

飲んだ時、私の眼がふと神棚にゆくと、そこに燈明が輝いて居るのを見た。と一緒に、その神棚の達磨が私をまともに見下した、完全につけられた二つの黒い眼で。

（小泉八雲―「こころ」による）

小泉八雲　アイルランド生れの英人、ラフカヂオ、ハーン。文章家。明治三十七年歿、五十五歳

一六　高原の野營

一　朝

高原の夜は早くも過ぎて、夜すがら天幕生活の枕にひゞいたペリカン鳥の叫も絶え、床下にひそむ木鼠の啼聲も遠のいた時、エロースストン湖畔の一夜は明けかゝつた。

まだ人のけはひもしない天幕のあたり、朝露にぬれた草の葉を踏みしだいて、隣の天幕の入口に誰か立止つたらしい。

エロースストン湖　北米合衆國ワイオミング州エロースストン國立公園内にある湖

「火はいりませんか。」

かういつて、毎朝一つ〳〵の天幕をノックしては入つて來て、ベッドのわきの小さいストーヴに火を作つて、二三本の薪を入れて行くのである。

「火はいりませんか。」

すゞしい朝風は聞覺えのある若者のやさしい聲をつたへる。今私の天幕の前に立つ大きな松の木まで來たらしい。

足音がとまると同時に、私は中から聲をかけた。

「どうぞ。」

軍隊生活をすましたといふ屈強な身體に、きりつとした身

支度をして、皮脚絆の姿かひ〳〵しい若者は、石油をかけた鋸屑をストーヴに投入れ、松薪を三本重ねて入れて、太いマツチを靴の横腹でぱつと擦つた。

火は移された。

ロツキー　北アメリカ州の西部と南北の西に走る大山脈

ロツキーの松は輕い音をたてて燃初めたが、狹い天幕の中はもう顏のほてる位にあたゝかくなつて來た。寢たまゝ半身をのり出して葉卷の煙を吹いてゐた私は、急いで身支度をし、皮脚絆を着けて、ストーヴで溫めた水で洗面をすまつと、垂幕をかゝげて朝の自然の中に出た。ひやりとする清い山氣は、頭が輕くなるほど心地がよい。

今しも紫の雲が低くたなびいて、連峯の色は旭に背いて紫紺に染出された。日の昇るのにつれて、山の端も水の色も漸く鮮かに變る。ふとけたゝましい羽音がする。一群二十幾羽のペリカン鳥が、あの巨大な嘴を空にむけて、躍るやうに紫の波をわけつゝ沖へと泳ぐのであつた。

二　夜

賑やかな晩餐のまどゐ、高らかなさゞめきや火床に燃えくづれる薪の音、誰かの調べるピアノの曲、かうした夏の夕の享樂が、野趣に富んだ天幕生活にも夜毎に繰返される。しかし眞の野營の面白さは、篝火につどふ夜のまどゐにこすものはない。

今日、野に山に、見たことと出遇つたことを、思ひ出しては話し

あふ中に、高原の夕日は容赦なく山の端に沈んで、美しい夕映が湖面に長く森影を宿す。入日をうけたロツキー諸峯の膚は、瞬く間にその色をかへて行く。そして夜の幕が大地にひそやかに下りて來る。

夕食後の一時間を靜に自分の天幕で過してゐると、篝火が出來たしらせの鐘が、懷しく木立を洩れて聞える。

大天幕の前に金枠を立てて、一抱もあらうかと思はれる大木の丸太が立てかけてある。それが炎々と天にとゞくばかりに燃える。篝火はアメリカ土人の遺風ででもあらうか、今ではアメリカの野營には附物である。火を圍んで粗末なベンチがあつて、かうした生活で親しくなつた人々が、

ギタ　琵琶の類の樂器
マンドリン　琵琶の類のイタリヤの樂器

そこに座を占めて今宵を樂しまうといふのだ。

篝火はどん〳〵と燃えてはくづれ、投込まれては燃える。くづれた時は眞紅の焔が、闇に流れて天に冲するかと物凄い。薄闇の木立を背にして、人たちの顏が赤々と照らされる。ひそ〳〵と語るのは老人連でもあらうか。突然後の方でギタとマンドリンの調べが初まつた。

夜は全く闇い。篝火情緒には申分のない夜だ。樂器の音にひかれた人々が後をふりむくと、大きな三本の樅の木を背に、美しい少女たちが樂器を抱へて、焔の行くへを見送りながら合奏の小手調べをしてゐる。

それから一しきり、美しい小曲が奏でられた。今夜の封切

である。後は拍手が豆をいるやうに起つた。つゞいて六十位の男が、顔に似合はぬやさしい聲で自作の歌をうたふ。合唱も起つた。かうして深山の夜は一分ごとに更ける。清興は燃える篝火と共に盡きさうもない。

餘りに殘惜しいが、私は翌日の用意もあり、日記や手紙も書かなければならないので、そつと座を滑つて、木立の陰の自分の天幕にかへる。

幽かな星の光に天幕の番號を讀んで中に入り、手さぐりでマツチを擦つた。蠟燭がゆらめいて自分の影が淋しい。篝火の方から、何が始まつたか、拍手の音が襲ふやうに響いて來る。あゝ、何といふ自然な生活であらう。明日はまたこの異國の人々と、見知らぬ絶景を眺めくらして、夜は篝火のまどゐに加はるのである。

（上原敬二―神祕鄉をたづねて）

上原敬二
林學博士。東京帝國大學教授

一七　夏の夜

しづけき夏の夜半の空
遠き蛙の歌きけば
無聲にまさるさびなれや
眠をさそふ水の音
心しづかに流るれど
夕月山に落行けば
影を涵さんよしもなし

星夜の空の薄光
心を遠くさそひつゝ
すゞしくそよぐ風の音は
神のかなづる玉琴に
觸れてやひゞく天の樂

昨日の夢とかなしみし
浮世の春はかはれども
見ずや常世の春の花
散らでしぼまで大空の

土井晩翠
名は林吉。第二高等學校教授

百蟲譜
德川時代の俳人横井也有の作つた俳文。鶉衣と稱する書の中に收めてある

星のあなたにほゝゑむを

（土井晩翠―天地有情）

一八　螢

「螢はたぐふべきものもなく、景物の最上なるべし。水に飛びかひ、草にすだく。五月の闇は、只この物のためにやとまでぞ覺ゆる」。

これは百蟲譜の一節であるが、實にこの通りで、亂れ飛んでは、此の頃の降りみ降らずみの空に、何の星かと疑はれ、叢にあつまつては、時ならぬに何の花かと怪しまれる。螢の美觀は、昔から人の目をひいて、凡そ文字あるほどの國民で、螢

の事を、何か多少書殘して居らぬものはない。それを讀むと、昔から世界の國々の人が、螢をいかに觀て居たかといふことが窺はれる。

さて、螢といふと直に火といふ聯想が起るであらう。現に我が國で「ほたる」といふ言葉は、火垂（ホタル）或は火照（ホテリ）といふ意から出たとも傳へられてゐる。又支那を始として、どこの國の言葉でも、螢といふ名はみな火といふことに緣がある。まことに此の火といふ聯想が、螢の命ともいふべきもので、若しこれがなかつたならば、恐らくは人の心をひく事がなかつたであらう。それは同じ螢科に屬してゐる昆蟲類で、其の形が螢によく似たものも少くないに關らず、其の美しい

晉の車胤　晉は支那歷朝の一で皇紀九二五年から一〇七九年まで續いた。車胤は貧家に生れて燈火の資なく、螢を集めて、夜間讀書し、後晉の高官となる

メキシコ　北米の南部にある共和國

光を缺いてゐる爲に、動物學者以外の人には、少しも知られないのを見ても明かである。

さて此の螢を、春の花、秋の紅葉など、同じく、一種の景物として、昔から特に東洋の人々が賞翫してゐることは、代々の詩歌・文章などに見えてゐる事であるが、更に之を燈火の代りに用ひた例も、晉の車胤の故事ばかりでなく、我が日本を始め西洋の國々にも少くない。

むかし北アメリカのメキシコの海岸では、海賊が横行して通行の船舶を劫したので、其の邊を通る船人は非常に恐れを抱き、夜間の航行には船中に燈火を用ひる事を禁じ、其の代りに其の地方で產する大きな螢を澤山に入れた籠を乘

客に渡しておいて、夜中にも用がたせるやうにしたといふ事である。此のやうな例は我が國の昔にもあつて、之を忍の提灯に用ひた事が、古い小説などに見えてゐる。

又ピーター、マーターといふ人が、發見後三十年ばかり後のアメリカの事を書いた「新世界」といふ書の中に、その土人が闇夜に深い森の中を行くのに、大きな螢を自分の足の拇指に縛りつけ、その光で足もとを照しながら歩く、その螢が弱つて光が薄くなると、新しいのと取替へて用ひたといふ事が書いてある。

現に我が近江の守山地方では、螢の光で夜道を辿る習慣があるといふ事である。其の邊は一般に螢が多く、小川に添

ピーター、マーター　イタリヤの歴史家（1457-1526）

守山　近江國野洲郡にある

うた田圃道などには、其の岸の草むらに數限りない螢が聚つてゐる。そこで杖を以て草むらを叩くと、螢が強い光を放つから、どんな暗の夜でも、明かに其の行手を見分ける事が出來るといふ。そこで、この邊の者は、提燈の代りに一本の杖を持つて歩くさうである。寂蓮法師の歌に

夏蟲の身をともしける光こそ
闇に迷はぬしるべなりけれ

とあるは、これらの事をいうたのであらう。

又キューバ島の邊では、螢を絲に繋いで、婦人の胸飾又は頭飾としてゐる。この邊の螢は、一寸餘もある大きなもので、其の光の強く美しい事は、ちやうど夜光の珠のやうだとい

寂蓮法師　平安朝末期の歌人。藤原俊成の養子となつたが、定家が生れてから出家した。建仁二年歿

キューバ島　西印度諸島中の最大島

ふ事である。

またベーコンといふ學者の書いた古い博物書に、むかしイギリスの片田舍の村では、子供が螢を捕つて、透きとほる瓶に入れて川の中に沈め、その光をあてに寄つて來る魚類を捕へたといふ話が書いてある。これは螢火を漁火に用ひた例で、わが國でも、魚が螢の火に引付けられたのを見た人がある事は、

螢火に飛びつく魚や水の音

といふ句でわかる。

又ある畫家は、螢の畫をかくのに、螢の光を使つたといひ、また近頃フランスのある學者は、螢の光で寫眞を撮つたともいひ、我が國でもある地方では養蠶の期節に、螢を多く集めて、籠に入れて、蠶室に備へて置いて、夜間鼠の害を防ぐといふ。

かやうに螢の光を燈火の代りに用ひるといふ事は、昔から今まで世界到る處に行はれてゐて、珍しい事ではない。想ふに燈火の發明のなかつた草昧未開の時代には、螢は隨分廣く燈火の代用を務めたものであらう。

（渡瀨庄三郎氏の「螢の話」に據る）

ベーコン　イギリスの哲學者（1561-1626）

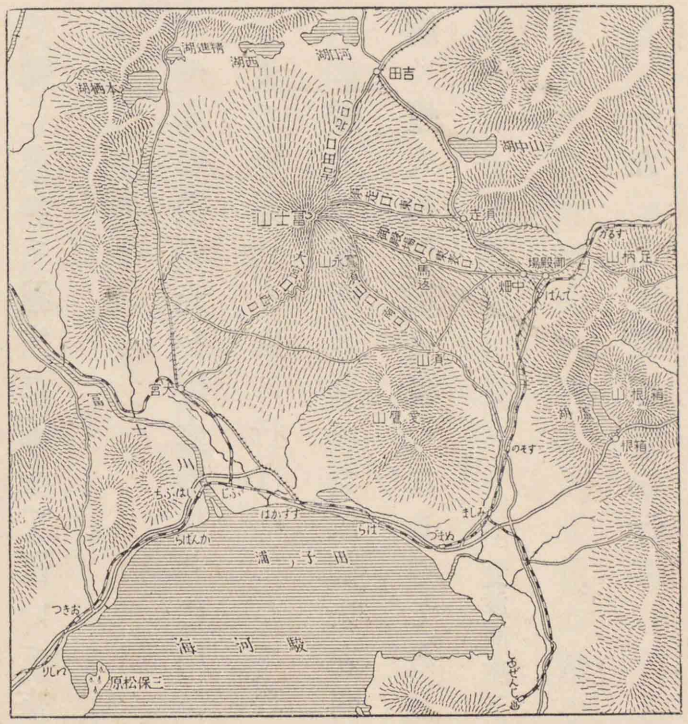
一九　富士登山　その一

渡瀨庄三郎　理學博士。東京帝國大學教授

作者は吉田口から登つたのである

お山は實に鮮かに晴れてゐた。夕陽の色どりを失つて、た

だ黑く隆々と盛りあがつた偉大な土の塊が、却つて彫刻的な尊嚴を以つて仰がれた。空は硝子のやうに透明で、ちぎれ雲の影一つさへなかつた。晝の光が消失せたにもかゝはらず、空氣そのものが光を持つてゐるやうに、薄靑く暮れずにゐた。路



はお山へ向けて眞直についてゐた。馬は慣れた道を心得

顏に、自分の好きな步調で私たちを運んでゐた。こゝらの裾野は小松が多かつた。小松の中に秋草が樣々に咲いてゐるらしいが、丈の低いのは皆夕の色に埋もれてしまつて、背の高い女郎花と路に近く咲いてゐる月見草だけが暮殘つてゐた。ふと西の空を見ると、今しもにじみ出た明星がたつた一つ、ぱつちりと光つてゐた。それは此の限りない野の廣さを支配する神の灯かとも見えた。又此の山の昔ながらの尊さを、私たちに暗示する表象かとも思はれた。

私は、だん〳〵と薄れる靄に包まれて行くあたりの景色を、馬上から眺めながら、そして其の目でぢつと明星を見つめてゐると、何といふ事なしに、涙ぐましいほど美しく淋しい

感激が、心にこみあげて來るのを覺えた。

「おゝ月が……」私は覺えず馬上でかう叫んだ、それは東の空に低く、研ぎすまされたまん圓い光が玲瓏と搖ぎ出た所であつた。月が出ると共に、景色の調子はすべて一變した。今まで一樣に薄青かつた空や裾野は、くつきりとして、光と影との二つに分れた。空は朗々とした光澤を帶びた。そしてお山はいよ〳〵黑く大きな姿を以て出現した。その半腹から上の方には、小さな寶石のやうな灯が點々として鏤められてゐた。それは石室の灯であつた。路の上にも白い光が流れて來た。そして私たちの七頭の馬が長い黑い影を投げ初めた。

馬返しの茶屋に着いた時は、夜氣を感ずる程だつた。「これから山も高くなるし夜もふけるから」と强力がいふので、私たちはメリヤスの肌着を着込んだ。褶（ホタ）の明りの暗い手元で、饂飩を一杯づつ食べた。そして又自分々々の馬に乘つた。「今夜のお山はいゝぞ。」「こんな日和は今年になつて初めてだ。」——馬子と茶屋の主人とがかう話してゐた。

清水から見た富士

一合目から上は樹の茂りがある。月は大分高くなつたら

しいが、枝がこんもりと茂つてゐるので路は暗かつた。先に立つて行く馬子が一人、提灯をつけて馬を導いて行く。後の馬はたゞ先の馬に續いて、暗い中を進むのであつた。勾配もだん〳〵急になつた。それに岩や石が多いらしく、馬の蹄の音がかつ〳〵と鋭く鳴つて來た。暗さの爲か、急な上りの爲か、馬は時々躓いた。さういふ時には蹄鐵から火花が飛散つた。しかし樹の枝の薄くなつてゐる所では、月の光が雪のやうに葉の上にかゞやいて、そこらを明るくした。又ふと茂みのとだえて居る所では、月の光が瀧のやうになだれ落ちて、路の上に溢れて居た。さういふ所を馬は勇しく歩を運んだ。

吉田口　山梨縣富士山の東北麓の登山口

三合目、四合目の室はもう戸を閉ぢてゐる。その前をひつそりと乘りながら過ぎた。五合目に着くと馬は心得たやうにぴつたり止まつた。樹帶はこゝらで全く盡きて、月はお山一面に照つてゐた。私たちは馬を下りた。馬はしつとりと汗ばんで、水を浴びたやうに濡れた肌を月にさらしながら、おとなしく足を揃へて居た。私たちはそこの室にはいつて熱い茶を甘く味はつた。そして用意して來た夕食の辨當を開いた。室には宿泊してゐる人が、蒲團一枚をひつかけてごろ〳〵と寢て居た。

五合目は「天地の境」と稱せられて居る。如何にも此のあたりまで登ると、地上を離れたといふ感じがする。吉田口か

ら裾野を來る時、しつとりと薄い夕霧が襲うて來るやうに思つたが、それはもや〳〵とした白い雲となつて、こゝから見ると低く裾野一面を蔽うて居る。その向ふに吉田の町の灯がちら〳〵と光つてゐる。それよりも猶遠く猶幽かに見えるのが船津の灯であつた。

船津　富士山の北麓河口湖畔にある

馬と馬子とを返してからの私たちは、強力を先に立てて、靜に靜に一歩々々を踏んで行つた。この夜ふけの山を踏んで居るものとては、實に私たちだけであつた。鳥もゐず虫もゐず、死のやうな靜寂の中に、七人の金剛杖の音のみがかちりかちりと岩にあたつて鳴つた。その杖は、五合目の室で「天地の境」といふ燒印を押してくれたものだつた。月は

まことによく冴えて、何も遮るもののない山の肌は、晝のやうに明るかつた。時計を出して見ると十時に三十分過ぎてゐる。その針がはつきりと月光に讀まれた。

自分の服にさはつて見ると、露でしつとりとしめつてゐた。莫蘆（ゴザ）や笠は暑さをしのぐ爲に身につけて來たのだが、それが今では露をしのぐ爲のものとなつた。山肌の岩や砂にすがつて生えてゐる僅かの靑いもの――偃松（ハヒマツ）や濱梨の木や薊（アザミ）など――の葉にも露が光つてゐた。空を見ると、疎らな星が大きな露の雫のやうにきら〳〵してゐた。さうした星がふつと流れて下界の方へ落ちたりした。こゝから見ると、白い雲が海のやうに浪立つ下界の方へ――。

精進の宿
精進湖畔の宿屋

六合目の室はぴつたり閉ぢて居たが、その前に差掛けのベンチが出來て居る。そこへ腰掛けて休んだ。私は精進の宿を立つ時新らしく替へて來た草鞋を踏切つたので、強力の背から一足取つて穿きかへた。

頂に近くなるにつれて、路といふ路がなくなつてしまふ。僅に人が踏んだあとの砂が、それと判るのであるけれども、踏堅められてゐるのではなく、足をかけると、さくり〳〵と辷るので、歩みは著しくはかどらなかつた。「さんげ〳〵六根清淨――」登山の行者が唱へる此の言葉を、先へ行く者と後になつた者とがお互に呼びかはして、心を引きしめ合つたりした。

七合目を越して八合目の室に入つて休んだ。時計を見るともう一時を過ぎてゐた。非常に睡いやうでもあつたが、こゝでなまじひに眠つてはいかぬと思つた。室の中の爐で木の枝を焚く烟が非常にけぶくて、目から涙がぽろ〳〵と落ちた。やはり目が疲れてゐる爲だと思つた。室の一隅に幕を引いて、別室のやうに仕切つて泊つてゐた外人の一群は、もう起きて立つ用意をしてゐた。頂上で御來迎を觀ようとするならば、そろ〳〵こゝを出なければならぬ頃だ。いつか爐の傍に横になつて、眠つてしまつてゐた強力の青年を呼起して、私たちは又登りはじめた。

二〇　富士登山　その二

山に醉つたといふよりも、睡眠を奪はれた爲であらう、頭がふら〳〵する。さういふ者が私の外に一人二人あつた。自分の莫蓙を山の勾配の儘に砂の上に敷いて、ごろりと寢て見た。砂の上には草一本の影もない。月はちやうど額の上に懸つて、いよ〳〵天心に澄切つてゐる。頭を高く仰向けになつた視線のはてに、北斗七星がきら〳〵と光つてゐる。私は其の一つをぢつと見つめてゐた。と其の星がふら〳〵と動き初める。小さな螺旋を描きながら踊つてゐる。不思議だなと思つて他の一つの星を見つめた。すると其の星も亦螢のやうにゆら〳〵と舞ひ始めた。これは幻覺だ。さう思ふと眼の疲勞の激しい事が解つた。また月を見た。月の光が眩し過ぎて涙がにじみ出した。九合目には久須志神社といふ神が祀つてある。そこへ入つて休んだ。神官の二三人が「なか〳〵寒い。併し今朝は氷が張らないから——」などと、もう朝の言葉を交はしてゐた。さうして私たちには「こゝは日の御子といつて、東へ眞正面の所です。こちらで御來迎をお拜みなさい。」といつたが、日の出までにはまだ二時間近くも間があるので、私たちは頂上を指す事にした。「頂上へ行く方は御祓をしていらつしやい。」神官はかうもいつて祝詞を讀んだ。それは、このよき日にお山へ詣でるよき人々の一族の平安を祈るといふ

意味を、神代の長々しい言葉を集めて綴つたものだつた。そして大きな御幣で、皆の並べた頭の上をばさり〳〵とはらつた。外へ出ると、これまで感じなかつた風が冷え〴〵と動いてゐた。それが黎明の近い事を思はせた。又その風がふら〳〵した頭を幾分かしつかりとさせてくれた。

月の光は漸く衰へ始めた。その上、路が東へ廻つたため、西へ傾きかけた月が頂の峯の陰になつてしまつた。光と影との差別は薄らいで、裾野の夕に見たやうな混沌とした青白い色が一様に漂うて來た。その混沌たるものの中から、新しい光の産れるのを待つばかりになつた。下界は――殊に甲州に寄つた方は――雲がぴつしり閉してゐた。その雲のはづれに、今までは雲と同じやうに白く見えてゐたものが、大きな勾玉の形をした湖水であるといふけじめもやつと明かに認められた。それが山中湖であつた。五湖の一として見殘したこの湖を、私たちはかうして鳥瞰的に眺め得たのであつた。

五湖　本栖湖、精進湖、西湖、河口湖、山中湖

項上の室ではもう灯を消して居たが、屋根の下は薄暗かつた。そこへ私たちは上つて御來迎を待つことにした。ぢつとしてゐると、寒さはひし〳〵と身に迫つて來る。手は凍えるし、吐く息も白く見えた。褞袍（ドテラ）を借りてかぶる者もあつた。下の室を早く立つて來たと見える人々が、ぽつぽつと登つて來て、室はいつか一杯になつてしまつた。皆草

鞋のまゝで上るのだが、脚と脚とを入れちがへて餘地もないやうな所へ、牡丹餅の箱などが並べられた。名物といふ眞黑な甘酒だけはうまかつた。

曉紅――朝の始まる前の先觸として、ほんのりとぼかし染にせられる地平線の赤さは、かうした高みから眺める時には、たゞに美しいばかりでなく、地上の物の一切の希望を語つてゐるやうな純潔なる尊さをにじみ出させてゐる、「あぢきに御來迎だ――」さういふ言葉が口々に傳へられて、室の中にゐた者も皆外に出た。大分明るくなつた岩の上には霜が置かれてゐた。それを踏んで寒さうな緊張した顏が並んだ。

地平線の赤さは、うつすりと吸取られて、そこにある神聖なものの誕生をつゝんでゐる幕のやうな霞が、つや〳〵しい光を帶びて來た。――つと、一點の輝く朱の色が霞の幕を押分けたと思ふ間に、その朱の一點が見る〳〵擴がつて、麗しい太陽の姿となつた。刹那、新らしい光線は地上に又天上に漲つて來た。その第一の光線がまつしぐらに屆いたのは、この頂上に立並んでゐる私たちの瞳であつた。

朗かな朝は來た。大空は實によく晴れてゐた。大地も實によく晴れてゐた。太陽を產んだ後の霞が消えた所に、烟の靡くやうに仄かに這つてゐるのは房總半島である。海は空と差別がないが、雲のやうに置かれた大島が、そこは太

平洋の中だといふ事を示してゐた。その手前に、更に鮮かに一抹の線を引いてゐるのが三浦半島である。海岸線に沿うて目を移すと、小さくしかも靜に江の島が見える。その右手は大磯であらう。小田原・熱海と思はれるあたりも、箱根や足柄の山々も、水銀を盛つたやうな蘆の湖が、外輪山の器の中に秘められてゐるのも、手にとるやうに見える。近くは愛鷹山の青い隆起を隔てて、天城山を中央とする伊豆半島がどつしりと延びてゐる。その右には洋々とした駿河灣が、描き殘された素絹の白さを以て光つてゐた。沼津・原・田子の浦と順々に南を眺めると、蛇の匐うたやうな富士川を越えて、三保の岬が小さく清水灣を抱いてゐる。その先に突出してゐるのは御前崎であらうが、そこらはもう霞んでゐる。私は此の大きなパノラマのやうな景觀に心を放つてゐた。

太陽はずん〳〵と高く昇つて、強いとろ〳〵とした光線が靈山の頂から下界へ向けて擴がつて行つた。

（荻原井泉水―山水巡禮）

荻原井泉水　現代の俳人

二一　笑話五則

一　テールス

ギリシヤの哲學者テールス、或時歩きながら一心不亂に天文を窺つて居た所、誤つて眞逆樣に溝の中へ落込んだ。通

ギリシヤ　歐洲南部バルカン半島にある國

テールス　天文學者、幾何學者（B. C. 640-B. C. 546）

り掛つた婆さん、この爲體（テイタラク）を見て、「天文の御研究は至極結構だが、天上の人ならばいざ知らず、地上に住居して居給ふ以上は、足元の御用心が肝心でござらう。」

流石の大哲學者も、これに對しては一言も無かつたさうだが、この先生天文の觀察に依つて非常な金儲をしたといふ話がある。彼は元來學問にのみ沒頭して、貨殖の計には一向心を留めなかつた故、常に赤貧洗ふが如く、村人は彼を嘲つて素寒貧テールスと稱した。テールスこれを不快に思ひ、何とか報復の手段もがなと考へて居た。或日天文を觀ると、慥かに翌年は油菜の豐年だ。そこで彼は諸處方々を歩き廻つて、壓搾機を悉く借入れてしまつた。翌年になる

ラフォンテーン　フランスの詩人で寓話作者（1621-1695）

マントルピース　ストーヴの前面、上部にある棚

と、果して油菜が非常な豐作であつて、彼方でも此方でも油を搾らうとしたが、壓搾機は皆テールスの一手占有に歸して居る。彼はこれを非常に高く貸して忽ちにして莫大の金を儲けた。テールス先生得意滿面、「口惡どもの油を搾つてやつた」。

二　ラ、フォンテーンの機智

寓話作者ラ、フォンテーンは、毎朝食事後、果物を食べる習慣であつた。或朝のこと、後でと思つて、一個の梨をマントルピースの上へ載せて置いて、一寸書齋へ行つた。その中に一人の友人が來訪したので、その室へ通した。彼が書齋から出て、その室に來て見ると件の梨が見えぬ。「おや誰か梨

を食べたのかしら」。友人は何食はぬ顔で、「僕ではないよ」。「君でなくつて幸だ。實は鼠を退治しようと思つて、あの梨へ亞砒酸を入れて置いたのだ」。友人は驚いて、「そりや大變だ。解毒劑は無いか」。「安心し給へ。今のは梨泥棒を見出す爲の策略なんだ」。

三　第一の理由

ウィースバーデンの或旅館の喫煙室で、毎夜夕食後、多數の浴客打集ひ、活氣横溢、談論風發、煙草の煙と共に互に氣焔の吐競べをした。或晩、室の一隅に政體論が持上つて、一人の共和主義論者が燃ゆるが如き熱辯を揮つて、共和政治の効能を說いた。座に一人の容貌魁偉な白髯の紳士があつたが、無言でこれを傾聽し、時々にや〳〵と笑つて居た。共和主義者はこれを見て、老人に對していふやう、「貴下は予と意見を異にせらるゝのであらう。貴下は恐らく王政論者であらう」。老人答へて曰く、「然り」。「果して然らばその理由を承りたい」と共和主義者は肉薄した。老紳士答へて曰く、「それには幾多の屈竟なる理由があるが、先づ第一の、そして最大なる理由は、拙者がスヰーデン王であるといふことである」。

ウィースバーデン　ドイツの有名な溫泉場

四　回教僧と信徒

回教僧某、說教壇の上より聽衆に向ひ、「信徒諸君は、予が今何を語らんとするかを知れりや」。聽衆異口同音に、「否、我等の

知る所に非ず」。「そんな愚鈍なる者に向つて說敎するは無益なり」。卽ち散會を命じ、自分はすた〳〵歸つてしまつた。次の日彼は又同じ問を繰返した。この度は聽衆、「これを知れり」と答へた。僧は、「旣に之を知れり。焉んぞ說くの要あらんや」と、又もや壇を下つて行つてしまつた。三度目には、信徒共今度こそは逃さぬ工夫をしようと相談の結果、同じ問に對して、「知る者もあり、知らざる者もあり」と答へた。坊主拔からず、「さらば知る者をして、知らざる者に說かしめよ」と、又もやすたこら行つてしまつた。

五　頓智で一命を拾ふ

或人、その奉侍する君主の逆鱗に觸れ、「汝の罪、死に當る。覺悟せよ」といふ嚴命を蒙つた。彼額を地に擦附けて、「どうぞ命だけは御助け下さるやう」と嘆願に及んだ。「それは相成らぬ。併し死に方は汝の選擇に委す。如何なる方法で死にたきか、卽答せよ」と。彼畏る〳〵頭を擧げて、「昔に變らぬ御慈悲有難く存じます。願はくは老病で死にたうございます」。王は失笑して遂に命を助けられた。

（和田垣謙三―西遊スケッチ）

和田垣謙三　法學博士。大正八年歿

二二　湘南雜筆

湘南　相模の海岸卽ち逗子・鎌倉・大磯の邊を呼ぶ文學的の語

一

梅雨晴れて、まさしく夏となりぬ。

障子開き、簾を下して坐すれば、簾外山青く、白衣の人往來す。富士も夏衣を着けぬ。碧の衣すが〳〵しく、頭には僅に二三條の雪を冠れり。青疊敷く相模灘の上を習々として渡り來る風の涼しきを聞かずや。

二

今日初めて蜩の聲を後山に聞きぬ。一聲さわやかにして、銀鈴を振れるが如し。

白日山に入り、涼は夕と共に生ず。外に出づれば、川に釣る人あり、談笑の聲あり、花火を揚ぐる子供あり。夏の季節は始りぬ。

三

日落ちぬ。石垣に腰かけ、足を垂れつゝ釣る。前に殘照流るゝ川あり、後に青蘆さや〳〵と戰げり。潮次第に滿ち、川逆さまに流れぬ。水澄みて水無きがごとく、水底地よりも鮮かなり。小さき鰻は藻より藻にのたうち、今年生れのかいづは、隊をなして、玉にも似たる水を游げば、その影ちらちらと底に印せり。石垣の穴より出で游ぶだぼ鯊は、螯をあげて迫り來る辨慶蟹を避けて身をかはせば、小鰕は杭を抱きて這登り、石垣に縋れる宿かりは身を投ぐる樣にころころと水底に墜ちゆく。

下流の方を望めば、下流却つて上流の如く、水は山影碧深く落つる邊より、涼風と共に流れ來る。潮滿ち盛れば夕陽明

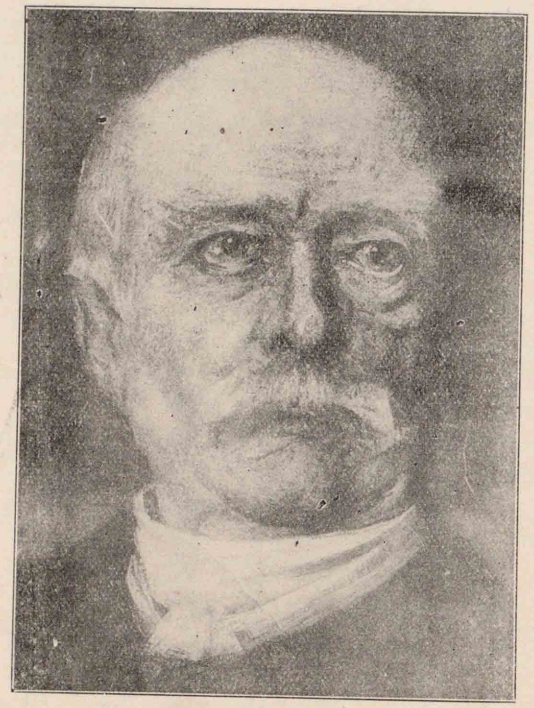
滅す。亂流の中、殘照の影やゝもすれば押流されんとし、小鮮群りて水を攪すれば、水流れてその紋を消し、髪の如き川底の藻は水に梳られて、今にも流れ出でんとすれば、幾隊の魚苗も止りかねて流れ行く。

垂れたる足の爪先に水とゞく頃は、殘照消え、潮も滿ちて淀みぬ。鯔跳つてまた水に落つる音、石を投ぐるやうなり。

（徳富蘆花―自然と人生）

二三　ビスマルクの幼時　その一

世に英雄と呼ばれ、豪傑と稱せらるゝ人々の言行は、往々にして常軌を脱し、まゝ常人の忖り（バカ）知り難きものあり。されば、世の人は、それら英雄・豪傑の士の偉業を見る毎に、皆これをもて、その人の天稟の才に歸して、深くその由る所をきはめず、かへつて吾人の到底企て及ぶべき所にあらずと思ひ諦むるが多し。



ビスマルク肖像（レンバツハ筆）

こはまことに思はざる事の甚だしきものといはざるべからず。蓋し英雄・豪傑の士の、その才常人に越えたるは、その天稟に出でたる所もあるべけれど、かゝる人々が、その志

を達して、英名を世に轟すに至るまでには、皆幾多の辛酸を嘗め、幾多の勉强を積みて始めて然りしものにて、その苦心の迹、また頗る常人に過ぎたるものあるなり。　これまことにわれらの心を留めて學ぶべき點なりとす。

ビスマルク　ドイツ國の政治家、鐵血宰相の名がある(1815-1898)

ビスマルクの如きは、その最もよき一例なるべし。　世の人は皆いへり、「かれの學校にありし間は、少しも讀書したることなく、たゞ擊劍・爭鬪のたぐひをのみ勵み、稍長ずるに及びては、乘馬に耽り、喫煙に淫したるに、その壯年に及びて漸く志を得、遂にドイツ帝國創立の偉勳を建てたるもの、これ皆風雲の際會と、彼が天稟の偉才とに因れり」と。　これ、まことにビスマルクを知らざる者の言のみ。

片田舍　シュレスウイヒ州のフリードリヒ・スルウヘといふ地

ベルリン　ドイツの首府プロシヤのブランデンブルヒ州スプレー河畔にある

スパルタ流　スパルタは古代ギリシヤ、ラコニヤ州の首府。其の教育法は頗る嚴格であつた

ビスマルクは、ドイツの片田舍なる貴族の家にうまれたりしが、その家庭は頗る嚴格にして、彼はいとけなき頃より、決して他の貴族の子弟のごとき悠長なる生活を許されざりき。　六歲に達せし時、母は彼を國都ベルリンに送りて、某博士の家塾に入學せしめたり。　その家塾は全くスパルタ流の教育にて、體操の外に游泳の課目もありて、過激なるまでに體育を行へり。　塾生は毎朝六時に起きいで、七時には教場に入らざるべからず。　朝餐はもとより、午餐・晩餐いづれも粗末なる物のみなり。　しかのみならず、我が膳に供へられたる食物をあます時には、皿を捧げて卓前に立たざるべからずといふ制裁さへありき。

嚴格なる家庭に生長せりとは聞きしかど、素より貴族の子にて、特に僅かに六歳の童なれば、塾長はビスマルクの果して耐へ得るか否かを疑ひしが、彼は少しも臆することなく、よく塾生の體面を保ちたり。

二四　ビスマルクの幼時　その二

いつしか夏となりぬ。游泳の始るべき時は來りぬ。塾生はこの新來の小童を苦しめんとして、樂しみてその日の來るを待てり。游泳所と定められたる河の兩岸には、塾生と教師と相竝びて立てり。すべて新しき生徒は、一度教師より水中に投入れられ、河の中には、又多くの塾生ありてこれを苦しめ、以て水に慣れしむるを例とせり。ビスマルクの、一たび河中に投ぜらるゝや、深く水中にしづみて再びその影を示さざりしが、しばらくして彼は前岸近く現れ、悠然として岸に上れり。人々相顧みて詞なく、皆その大膽なるに驚けりとか。これよりビスマルクの名塾中に高く、彼は遂に一方の首領として仰がるゝに至れり。

粗暴にして體力强きものは、多くは學業に拙きものなり。さるをビスマルクは、教場に入りても亦その聰慧なること、往々學友を壓して教師を感歎せしめたり。ことに彼は世界歴史を好み、ギリシア・ローマの古英雄の傳記は、最もその愛讀せしものにして、消えかゝれる殘燈の下に、ひとり史書

を繙いて樣々の空想に耽り、得々として夜の更くるをも知らざりしこと殆ど連夜なりきといふ。

十七歳の時、ある中學に轉じて、こゝにて學士ボンネルといふ歴史科教師の信用を博し、朝に夕にその居を訪うて、深く歴史の研究に心を委ね、孜々として少しも怠らず。平生の粗暴なるに似ず、書に對しては常に寢食を忘れたり。思へばこれ誠に彼が一世の偉業を大成せし基にして、その事に當りて裁決流るゝが如く、奇策縱横にして、その用意の周到なる、自信の鞏固なる、皆これ歴史研究の賜なりといはざるべからず。世に天稟の才といふこと無きにはあらねど、琢かずば玉も瓦礫に等しからん。ビスマルクが我を折り節

オーストリア云々　オーストリアと戰端を開いたのは西暦一八六六年六月である

を屈して讀書に勉めたりし一事は、われらの深く鑑みるべきことにあらずや。

後年彼が國政に任じ、遂にオーストリヤと戰端を開きて、旬日の間に城下の盟をなさしめ、勳威赫々としてベルリンに凱旋するや、舊師ボンネルは、當時ベルリン中學の校長なりしが、この報に接して、欣喜措く能はず、直ちにビスマルクを訪ひ、辭をあらためて、その偉勳を稱揚し、「閣下よ、閣下は嘗て愛讀せられたる世界歴史の中に、今日はみづから壯快なる一節を記入せられしにあらずや。」といへば、ビスマルクは深くその舊恩を謝し、しづかに答へて、「否先生の讃辭は我の當る所にあらず。されど多年の素志こゝに遂げて、歴史研究

の實を擧ぐることを得たり」といへりとぞ。多年薫陶に從事せし舊師の喜びはいかに。またその素志を遂げしビスマルクの愉快はいかに。聞くわれらまで、心のうごくを禁ずることあたはざるなり。

（落合直文）

落合直文　國文學者。明治三十六年歿、四十二歳

二五　ポチ

私は元來動物好きで、別して犬は大好きだから、近所の犬は大抵馴染だ。けれども、こんなかぼそい、いたいけな聲で啼くのは、一匹も無い筈だから、不思議に思つて、そつと夜着の中から首を出すと、

「どうしたの。寢られないのかえ。」

と母が寢がへりを打つて、こちらを向いた。私はこの返答はさしおいて、

「あれは白ちやないねえ、お母さん。もつと小さい犬の聲だねえ。どうしたんだらう。」

「棄犬さ。」

「棄犬つて、なあに。」

「棄犬つて……誰かゞ棄てていつたのさ。」

長谷川二葉亭

私はしばらく考へて、

「誰が棄てていつたんだらう。」

「大方何處かの……何處かの人さ。」

何處かの人が犬を棄てていつたと、私は二三度反復して見たがわからない。

「どうして棄てていつたんだらう」。

「うるさいよ」などといふ母ではない。何處までも相手になつて、その意味を説明してくれて、「もうおそいから默つておく寢」と優しくいつて、又あちらを向いてしまつた。

私も亦夜着をかぶつた。犬は門前を去つたのか、啼聲が稍〻遠くなるにつれて、父の鼾が又うるさく耳につく。寢られぬまゝに、私は夜着の中で今聞いた母の説明を繰返し繰返し味はつて見た。

まづどこかの飼犬が、縁の下で兒を生んだとする。小さな

むく〳〵したのが重なり合つて首を擡げて、みい〳〵と乳房を探してゐる處へ、親犬がよそから歸つて來て、その側へどさりと横になり、片端から抱へこんでべろ〳〵舐めると、小さいから舌の先で他愛もなくころ〳〵と轉がされる。轉がされては大騒して起返り、又よち〳〵と這寄つて、ぽつちりと黑い鼻面でお腹を探りまはり、漸く思ふ柔かな乳首を探りあて、うろたへてちうと吸付いて、小さな兩手で揉立て揉立て吸出すと、甘い溫かな乳汁がどく〳〵と出て來て、咽喉へ流れこみ胸を下つて、何ともいへずおいしい。と、腋の下からまだ乳首にありつかぬ兄弟が鼻面で割込んで來る。とられまいとして、産毛の生えた腕を突張り、大騒をや

つてみるが、とう〳〵とられてしまひ、又そこらを尋ねて、他の乳首に吸付く。　その中にお腹もよくなり、親の肌で身體（カラダ）も溫まつてとろけさうなよい心持になり、ついうと〳〵となると、含んだ乳首が脱けさうになる。　夢心地にもうろたへて又吸付いて、一しきり吸立てるが、すぐに又他愛なくうとうととなつて、乳首が遂に口を脱ける。　脱けても知らずに口を開いて、小さな舌を出したなり、一向正體がない。

その時忽ち暗やみから、もぢや〳〵と毛の生えた、節くれ立つた大きな腕がぬつと出て、正體なく寢入つてゐる處をむづと引掴み宙につるす。　驚いて目をぱつちりあき、いたいけな聲で悲鳴をあげながら、四足を張つてもがく中に、頭から何かで包まれたと見えて眞暗になる。　窮屈で息氣（イキ）が詰りさうだから、出ようとするが出られない。　暫くもがいて居る中に、ふと足搔が自由になる。　と、えりもとをつまれて、高い〳〵處からどさりと落された。　うろ〳〵としてそこらを見廻すけれど、何だか變な淋しい眞暗な處で誰も居ない。　茫然としてゐると、雨に打たれて見る間に濡れしよぼたれ、おそろしく寒くなる。　身慄ひ一つしてくん〳〵と親を呼んで見るが、何處からも出て來ない。　途方に暮れてよち〳〵と這出し、雨の夜中を唯ひとり溫かな親の乳房を慕つて悲しげに啼廻る聲が、先刻一度門前へ來て、又何處へかさまよつて行つたやうだつたが、それが何時か戻つて來

て、何處をどうもぐり込んだのか、今は啼聲が正しく玄關先に聞える。

「お母さん〳〵、門の中へ入つて來たやうだよ」。

と、私が何だか居たたまらないやうな氣になつて、又母に言掛けると、母は氣のなささうな聲で、

「さうだね」。

「出て見ようか」。

「出て見ないでもいゝよ。寒いぢやないかね」。

「だつて。あら、あんなに啼いてる……」。

と折から絶入るやうに啼入る犬の聲に、私は我知らずむつくり起上つたが、何だか一人ではこはいやうな氣がして、

「よう、お母さん、行つて見てよう」。

「本當にしやうのない兒だねえ」。

と、口小言をいひ〳〵母も澁々起きて、雪洞（ボンボリ）を點けて立上つたから、私もその後について、玄關といつてもつい次の間だが、玄關へ出た。

母が履脫（クツヌギ）へ降りて格子戸の掛金を外し、からりと雨戸を繰ると、さつと夜風が吹込んで、雪洞の火がちら〳〵と靡く。その時小さな鞠のやうな物が、つと軒下を飛退いたやうだつたが、やがて雪洞の火先が立直つて、一道の光がさつと戸外の暗黑を破り、雨水の處々に溜つた地面を一筋細長く照らし出した處を見ると、ついそこに生後まだ一箇月もたゝ

ぬ、むく〳〵と太つた、赤ちやけた犬ころが、小指程の尻尾をちぎれさうにふり立てて、こちらを見上げてゐる。體は私が寢てゐて想像したよりも大きかつたが、果して全身雨に濡れしよぼたれて泥だらけになり、だらりと垂れた、割合に大きい耳から雫をたらし、ぽつちりと二つの眼を青貝のやうに並べて光らせてゐる。

「おや〳〵、まあ、可愛らしい」。

と母もつい言つてしまつた。況んや私は犬好きだ。ぢつとして見ては居られない。母の袖の下から首を出して、ちよつちよつと呼んで見た。

と、さほど怖れた樣子もなく、ちよこ〳〵と側へ來て、さすがに少し平べつたくなりながら、頭を撫でてやる私の手を、下からぐい〳〵押上げるやうにして、べろ〳〵と舐廻し、手をくれるつもりなのか、頻りに圓い前足を擧げてばた〳〵やつてゐたが、果てはやんわりと痛まぬ程に小指を咬む。

私は可愛くて可愛くてたまらない。母の面を見上げながら、少し鼻聲を出しかけて、

「お母さん、何かやつて」。

「やるもよいけど、居付いてしまふと仕方がないねえ」。

と、口では拒むやうな事をいひながら、それでも臺所へ行つて、缺茶碗に冷飯を盛つて、何かの汁をかけて來てくれた。

早速履脫へ引入れてこれをあてがふと、犬ころは一寸香を

嗅いで、すぐ甘さうに、先づぴちや〳〵と舐出したが、汁が鼻の孔へ入ると見えて、時々くしやん〳〵と小さな嚏(クシヤミ)をする。忽ち汁を舐盡して、今度は飯にかゝつた。他に爭ふ兄弟も無いのに、しきりに小言をいひながら、がつ〳〵とたべ出したが、飯はまだ食ひなれぬかして、とかく上顎に引付く。首をふつて見るが、そんな事ではなか〳〵取れない。果ては前足で口の端を引搔くやうな眞似をして大藻搔に藻搔く。この隙に私は母と談判を始めて、今夜一晩泊めてやつてと、雪洞を持つた手にぶらさがる。母は一寸澁つたがもうかうなつては仕方がない。お父さんに叱られるけれどといひながら、つまり棧俵法師を探して來て、履脱の隅に敷いて

やつた。それはよかつたが、その晩一晩啼通されて、私はちつとも知らなかつたが、お蔭で母は父に小言をいはれたさうな。

犬嫌ひの父は、泊めたその夜を啼明されてしまふと、うんざりして、明くる日は是非逐出すといひ出したから、私は小犬を抱いて逃廻つて、どうしても放さなかつた。父は困つた顔をしてゐたが、しかしそれも一時の事で、その中に小犬も獨寢に慣れて夜も啼かなくなる。と、逐出す筈のものに、いつしかポチといふ名まで付いて、姿が見えぬと父までが一緒に捜すやうになつてしまつた。

父がかうなつたのも、無論ポチを愛したからではない。唯

私にひかされたのだ。私とてもポチを手放し得なかつたのは、強ちポチを愛したからではない。愛す愛さんはさておいて、私は唯かはいさうだつたのだ。親の乳首にすがつて居る處を、無理に無慈悲な人間の手に引離されて、暗い浮世へ突放された犬の兒の運命が、子供心にも果敢なく情ないやうに思はれて、手放すに忍びなかつたのだ。

この忍びぬ心と、その忍びぬ心を破るに忍びぬ心と、二つの忍びぬ心の搦み合つた處にポチは旨く引懸つて、辛くも棒や石ころの危ない浮世にさまよふ憂目を免れた。で、どうせそれは蜘蛛の巣だらけではあつたらうけれども、ともかくも雨露を凌ぐに足る緣の下の菰の上で、うまくはなくと

も朝夕二度の汁かけ飯に事缺かず、まづ無事にのんびりと育つた。

育つにつれて、まる〳〵と太つてかはいらしかつたのが、身長に幅をとられてひよろ長くなり、しかもひどくとぎすになつて、一寸狐のやうな犬になつてし、まつた。前脚を突張つて、弓のやうに反つて伸をしながら、大きな口をあんぐりあいて欠をする處などは、誰が眼にも餘り見つともよくなかつたから、父は始終「いやな犬だ」「いやな犬だ」といつて私をいやがらせたが、私はそんなことで、愛をさますやうな心は聊かも無い。いやな犬だといはれるほどなほかはいい。

「ねえお母さん、こんな犬は何處へ行つたつて、かはいがら

れやしないねえ。だから内でかはいがつてやるんだねえ」。

と、いつも苦笑する母を無理に味方にして、からかふ父と爭つた。

犬好きは犬が知る。私のこの心は、ポチにも自然と通じてゐたらしい。その證據には犬嫌ひの父が呼んでも、ほんの一寸お愛想に尻尾をふるばかりで、振向きもしないで行つてしまふことがある。母が呼ぶと、不斷食事の世話になる人だから又何か貰へるかと思つて、眼を輝かして飛んで來る。そして母の手中にそれらしい物があれば、兎のやうに跳ねて喜ぶ。が、しかし唯それだけの事で、その時のポチはやつぱり犬に違ひない。

二葉亭四迷　姓は長谷川、名は辰之助、文學者、新聞記者。明治四十二年歿、年四十八

馬場下　東京市牛込區

高田の馬場　武藏國北豐島郡。東京市の郊外

そのやつぱり犬に違ひないポチが、私に對ふと犬でなくなる。それとも私が人間でなくなるのか。どつちだかそれは分らないが、とにかく互の情愛に人畜の差別を無くして、渾然として一如となるのである。

（二葉亭四迷―平凡）

二六　子供の時の家

私の舊宅は、今私の住んでゐる處から四五町奥の、馬場下といふ町にあつた。町とはいひながら、その實小さな宿場としか思はれぬくらゐ、子供の時の私には寂れ切つて淋しく見えた。もと〳〵馬場下とは高田の馬場の下にあるとい

ふ意味なのだから、江戸繪圖で見ても、朱引内か朱引外か分らない邊鄙な隅の方にあつたに違ひない。

それでも藏造の家が、狹い町内に三四軒はあつたらう。坂を上ると右側に見える、近江屋傳兵衞といふ藥種屋などはその一つであつた。それから坂を下り切つた所に、間口の廣い小倉屋といふ酒屋もあつた。尤もこの方は藏造では無かつたけれども、堀部安兵衞（赤穂四十七士の一人。元祿の初、寺田藤十郎を助けて、その仇を討たせた）が高田の馬場で敵を討つ時に、此處へ立ちよつて、桝酒を飲んで行つたといふ履歴のある家柄であつた。私はその話を子供の時分から覺えて居たが、つひぞ其處にしまつてあるといふ噂の、安兵衞が口を着けた桝を見たことが無かつた。その代り、其處の娘さんの長唄は、何度となく聞いた。私は子供だから、上手だか下手だかまるで解らなかつたけれど、私の宅の玄關から表へ出る敷石の上に立つて、通りへでも行かうとすると、その聲が其處からよく聞えたのである。春の日の晝過ぎなどに、私はよくうつとりとした魂をうらゝかな光に包みながら、長唄のおさらひを聽くでも無く聽かぬでも無く、ぼんやり私の家の土藏の白壁に身をもたらせて、佇んで居たことがある。そのお蔭で私はとう〳〵、「旅の衣は篠懸の」などといふ文句を何時の間にか覺えてしまつた。

この外に棒屋が一軒あつた。それから鍛冶屋も一軒あつた。少し八幡坂の方へ寄つた所には、廣い土間を屋根の下

やつちや場　問屋でせり賣をするところ

へ抱へ込んだやつちや場があつた。私の家のものは、其處の主人を問屋の仙太郎さんと呼んで居た。仙太郎さんは、何でも私の父と極遠い親類つゞきになつてゐるんだとか聞いたが、交際からいふとまるで疎濶であつた。往來で行きあふ時だけ「好い御天氣で」などと、聲を掛ける位の間柄に過ぎなかつたらしく思はれる。子供の私には、その仙太郎さんが高い臺の上に腰を掛けて、矢立と帳面を持つたまゝ、「いーやつちや幾ら」と威勢の好い聲で、下に居る大勢の顔を見渡す光景が餘程面白かつた。下からは又二十本も三十本もの手を一度に擧げて、みんな仙太郎さんの方を向きながら「ろんじ」だの「がれん」だのといふ符牒を、罵るやうに呼上

げるうちに、薑（シヤウガ）や茄子や唐茄子の籠が、それらの節太の手で、どし〳〵何處かへ運びさられるのも勇ましかつた。

どんな田舍へ行つても有りがちなのは豆腐屋だ。こゝの豆腐屋には、油の臭の染みこんだ繩暖簾がかゝつてゐて、門口を流れる下水の水が、京都へでも行つたやうに綺麗だつた。その豆腐屋につゞいて廻ると、半町程先に西閑寺といふ寺の門が小高く見えた。赤く塗つた門の後は、深い竹藪で一面に被はれてゐるので、中にどんなものがあるか、通りからは全く見えなかつたが、その奥でする朝晩のお勤の鉦の音は、今でも私の耳に殘つてゐる。ことに霧の深い秋から木枯の吹く冬へかけて、かん〳〵鳴る西閑寺の鉦の音は、何

時でも私の心に、悲しくて冷たい或物を叩き込むやうに、小さい私の氣分を寒くした。

當時私の家から、まづ町らしい町へ出ようとするには、どうしても人家の無い茶畠とか、竹藪とか、又は長い田圃路とかを通り拔けなければならなかつた。買物らしい買物には大抵神樂坂まで出る例になつてゐたので、さうした必要に馴らされた私に、さしたる苦痛のある筈も無かつたが、それでも寺町へ出ようとする、あの五六町の一筋道などになると、晝でも森として、大空が曇つたやうに始終薄暗かつた。あの土手の上に二抱も三抱もあらうといふ大木が、何本となく並んで、その隙間々々をまた大きな竹藪で塞いで居た

神樂坂　東京市牛込區

寺町　牛込區の町名

のだから、日の目を拜む時間といつたら、一日の中恐らくただの一刻も無かつたらう。下町へ行かうと思つて、日和下駄などを穿いて出ようものなら、きつとひどい目にあふに極つてゐた。あすこの霜どけは雨よりも雪よりも怖しいもののやうに、私の頭にしみこんで居る。

そのくらゐ不便な所でも、火事のおそれはあつたものと見えて、やはり町の曲角に高い梯子が立つてゐた。さうしてその上に古い半鐘も型の如く吊してあつた。私はかうした有りのまゝの昔をよく思ひ出す。その半鐘のすぐ下にあつた一膳飯屋も、おのづと眼先に浮んで來る。繩暖簾の隙間から、あたゝかさうな煮しめの香が煙と共に往來へ流

れ出して、それが夕靄の中に解けこんで行く趣なども忘れる事が出來ない。私が子規のまだ生きてゐるうちに、

半鐘と並んで高き冬木哉

といふ句を作つたのは、實はこの半鐘の記念のためであつた。

（夏目漱石―硝子戸の中）

夏目漱石　名は金之助。英文學者。小説家。大正五年歿した。年五十

二七　月見草

代々木　東京市に隣接せる代々幡村の大字

ある日、晩の食事がすんだあとで、私は友だちと二人で、代々木の原を歩いてゐました。

夏の黄昏の光線は、實に美しく、爽かなものです。緑の木の葉は、晝の間とまるで違つた光をふくんで來ます。自分の

中からも、光があふれて出て來るやうです。柔な緑の湯氣が立ちこめるやうです。空氣の中には微な心持のいゝしめりがこもつて來て、それが、身體を包んでしつとりして來ます。この柔い光としめりとの中をあるいて行きながら、私たちは靜な聲で話してゐるのでした。この友は、この時に遠い旅に行く前だつたのです。しかし、私たちは少しも旅の事などを話しては居なかつたのでした。黄昏の薄あかりがだん〳〵暗くなつて、灰色がゝつて來ます。いろいろな色が、黄・赤・緑・紫、その他にも幾つかの色が溶けこんでゐる、不思議なほど複雜な灰色です。その中で、黄昏から開く夏の夜の花が、もう咲出さうとして、ふくらみ始めるのです。

こちらで一番多い「夏の夜の花」は、烏瓜と月見草と夕顔とです。　廣い野原は、おどんだやうに靜まつて、薄い靄が立ち、だんだん暗くなつて來ます。　その中で木は、茂つた葉から湯氣を吐出すやうに、ごく微な水蒸氣で、陰にまつはられ隈どられて、その茂みの中に暗いものが籠つて來ます。

空の上の方には、まだすき透つた日の光が、いくらか殘つてゐます。　その中で星が、黃金の輝きで鮮かにきらめいて光り始めてゐます。

私たちは暗い林のわきを通つて、もとは澤地だつたらうと思はれる窪みについた道を下りて行きました。　その先は、西南に向つて展けた廣い畑地につゞいてゐる草原です。

少しばかり櫟・楢の雜木があつて、その下草が茂つてゐました。

まだはつきり人の顏が見えると思はれるくらゐの明るさの中で、私は黃色い花を見ました。　殆ど交り氣のないと思はれるほどの柔い黃色です。　私は立止つてしまひました。

そしてつれの人の顏を見ました。

「月見草ですね。」と、その友達は平氣な聲でいひました。「默つて……」といふやうに、思はず私は目でその人の言葉をおさへました。　この時に私は妙に敬虔な心持になつて、靜にその花のそばに寄つて行つたのです。　友だちはそこに立つたまゝ、腑に落ちないといふ樣子で、私を見てゐます。

私の樣子は、よそから見ると、をかしかつたかもしれません。しかし自分では、非常に強い緊張した心持になつてゐるのでした。

「何といふ、靜で強い美しさだらう。この廣い野の中から、この花のまはりの一坪だけをきり取つて見て……それだけで、私たちは人間の言葉で言ひ盡す事の出來ない、實に立派な自然の魂を見る」と、私は思つてゐるのでした。

そこに茂り重つてゐるいろ〳〵な雜草の葉の形は、互に入亂れて、その綠が黑ずんで沈んでゐます。今こゝで見えるのは一つ〳〵のものの形よりも、その全體の色です。暗い綠の色は、もりあがつて茂つた盛な力で、ぢつと動かないの

です。その草の中を二尺ばかりもぬいて一本、月見草の、花をつけた莖がまつすぐに立つてゐます。この草藪の中に、月見草はたつた一本あつたのです。その莖に三つ柔く廣い瓣の花が開いてゐます。

その花の色が、月の光のやうにぽつとした黃色で、薄く隈をとつて明るくなつてゐるやうです。あたゝかな柔みのある明るさが、この草のくらい綠の上を照してゐるのです。もうごく微になつてゐる空の上の光を鋭く感じて、それをこの闇の底から反射させてゐるのです。それに自分のからだの中からも光があふれ出て來てゐるのです。水をたつぷり含んだ細胞の粒が、はり切つてふくらんで行くので、

柔な、あたゝかい光があふれて來るのです。

私は壯嚴なものを見る氣がしました。そのそばに寄つて行つて見ると、も一つ、四つめの花が、おくれて今開かうとする處でした。花瓣を包んでゐる鞘のやうな形の萼が、もとの方から裂けて、その裂目から純黃の花瓣がふくらみ出してゐる處です。

私はその花瓣が、すつかり開いてしまふまで見てゐようと思つてゐました。きつと目で、その花瓣がふくらんで伸びるのが見えると思つたからでした。花はもう一刻も休まずにふくらんで行くのです。

しかし人間の肉眼は、それをはつきり見る事が出來ないのです。私はいつまでも同じものを見てゐる氣がしました。そのうちに友だちが呼びました。振返つてほんの三十秒もかゝつて二言三言話をして、又花を見ると、もう萼はすつかり裂けて、その尖端のところだけがついてゐるのでした。花瓣はその中からはみ出して、今までにだん〳〵萼を裂いて來た力を見せてゐます。と、ごく輕い風が來て、その花を搖つたはずみに、萼はすつかり裂けてしまつて、ばつと、重い圓い花瓣が開きました。そして深い喜ばしい吐息をしたやうでした。

（水野葉舟―追懷）

水野葉舟
現代の文學者

二八　智慧伊豆守

智慧伊豆守とは松平伊豆守信綱の事なり。その伊豆守が智慧の名稱を獨占せるは、如何なる功業によるかと討ぬるに、格別の功業は無し。伊豆守は老中となりたり。されど、老中となりたればとて、特に智慧の名稱を得らるべくもあらず。伊豆守は島原の亂を平げたり。されど島原の亂を平げたればとて、特に智慧の名稱を得らるべくもあらず。さらば智慧伊豆守の名は何によりて得たるか。

島原の亂　肥前の耶蘇教徒が島原城に據つた亂。寛永十五年二月平定

或時將軍鷹狩して雲雀を多く獲たり。休息の際將軍之を味はれんとす。急の事とて、老中ども雲雀を金串に刺して燒くに、火强く手先熱して堪へられず、急げば急ぐほど早く燒けず、大いに困り居たり。伊豆守後れて來り、傍に木片あるを見出し、それを金串に刺して燒くに、火熱手に及ばず、やすやすと燒くを得たり。而も最も後に燒始めし伊豆守が最も早く燒終へたり。他の老中ども舌をまき、平日の勤はとても伊豆守に及ばず。かやうなる假初の事だにも仕負けたり」とて笑ひたりといふ。これ一場の頓智なり。されど、これを以て智慧伊豆守の智慧を證明すべきには非ざるなり。

將軍　三代將軍德川家光

或時將軍御堀にて小鷹狩ありしが、和田倉橋邊にて、堀の水鳥を追立たせよと命ず。然るに何處を見ても小石なし。伊豆守ふと側の店に蛤を賣りをるを見て之を買取り、石の

和田倉橋　今の宮城正門前御苑の東北にあつて、内濠に架けた橋

八重洲河岸
丸の内、大手外郭の南、内濠の沿岸なる一郭

代りにして之を投げ、水鳥を追立てたり。これも一場の頓智なり。されど、之を以て智慧伊豆守の智慧を證明すべきには非ざるなり。

或時將軍朝鮮人の曲馬を覽んとて、八重洲河岸に馬場を構へさす。事急なり。土手を築かんはなし得ぬにはあらねど、忽ち築き忽ち取除くは無益なり。乃ち、伊豆守の指圖にて籠屋に命じ、數百千の竹籠を造らせ、其の上に芝を置かせて、瞬く間に晴の馬場が出來たり。これも一場の頓智なり。されど、之を以て智慧伊豆守の智慧を證明すべきには非ざるなり。

以上の如き逸話は一々枚擧するに遑あらず。少年時代の

二代將軍
德川秀忠

雀とりの失策は有名なる話なれば、誰も聞知りたらん。二代將軍が、「以て大事を託するに足る。」と感ぜられしも宜なりけり。この一事は以て伊豆守の人となりを知るべし。己は八裂にせらるゝとも主君の過失を言はず、世にも頼もしき人なるかな。

智の有無は生れつきにもよれど、少年時代よりの心掛の如何にも由るなり。請ふ、伊豆守が如何にして智を得たるかを見よ。或人伊豆守に向つて、如何にして智を得たるかを問ふ。答へて曰く、「これ我一人の力にあらず。何人の智も、もと格別の差なきものなり。若し我に智ありとせば、そは此の物のお蔭なり。」とて足を見せたり。その足の甲に畏り

實父　大河内久綱
養父　松平正綱

だこ四つ五つあり。足の甲にたこあるは正坐謹聽に慣れたればなり。伊豆守曰く、「我が實父も養父も家康公・秀忠公に召使はれて、御才覺と御家法とを能く〳〵存じたり。我は幼少の頃より、正坐して實父・養父の教を謹聽せり。秀忠公・家光公の御側に晝夜相勤めたり。御次に丸寢して段々承ることを考へに考へたり。かくて足にはたこが出來たり、心には才覺が出來たり」と。嗚呼、伊豆守の智慧は正坐謹聽の賜なり。今の世の青年、多く放縱我執に陷れり。大成せざるも宜なるかな。若し大成せんと思はば、伊豆守の足だこに就いて反省せざるべけんや。

伊豆守の臨終は、殊によく智慧伊豆守の實を發揮せり。伊

四代將軍　徳川家綱

豆守病んで將に死なんとせし時、三代將軍と四代將軍とより賜へる親筆の書を悉く取出させて、之を新しき藥研に入れて燒かせたり。而して我が身と共に埋めよと遺言したり。何が故に伊豆守は將軍の手書を燒きけるぞや。其の中には世間に洩らすべからざる祕密の事もあるべし。されど、多くは伊豆守の功を褒めたるものなるべし。子孫若し之を鼻にかくることもあらばゆゝしき事なり。故に一切之を燒きたり。我が身の死すると共に、我と我が功を自ら沒したり。嗚呼、是、智慧伊豆守が智慧に相應する功業の世に現れざる所以なり。而して又智慧伊豆守の智慧伊豆守たる所以なり。

（大町桂月―すゞりの水）

二九　心の修養

伏見天皇（第九十二代の天皇）の御代に、日本全國から、刀工十八人を選び出して、各一振づゝの刀を徵されたことがあつた。その中で、第一の選に當つた刀が、天皇の御守になるといふのだから、諸國の名工はみな畢生の腕を揮つて、その刀を鍛へ上げた。

當時、日本一の刀鍛冶と、人も許し、自らも誇つて居たのは、越中の國松倉（松倉下新川郡松倉村。魚津港の南二里）の人、鄕義弘（鄕義弘右馬允と稱す）である。義弘は當時刀打つ業では、恐らく自分の右に出づるものはあるまい、自分こそ必ず第一の選に預るに相違ないと待構へて居たところ、思の外に、相州の正宗（正宗相模國鎌倉町雪の下に住す）が第一といふことに定められた。義弘は之を聞いて、かれ正宗は、刀を打つよりも、世わたりの方が上手で、賂でもつかつて、この僥倖を得たのであらう。よし、それならばこれから相州に赴いて、一刀に斬つて棄てようと、決死の勢で越中の國からはるゞ〳〵相州鎌倉へ出かけて往つた。

義弘は正宗の家に着くと、ちやうど仕事場には槌の音が聞えたので、まづその窓から中の樣子を覗つて居たが、たちまち何を悟つたか、今までの勢は何處へやら、しを〳〵として玄關に行き、刺を通じて正宗に面會を求めた。

正宗は、有名な義弘と聞いて、すぐに迎へ入れた。義弘は初對面の挨拶を慇懃に述べて、「さて正宗殿。何を隱さう、自分は今日貴殿と腕くらべして、樣子によつたら貴殿を討果す

覺悟で參つたところが、今よそながら貴殿の仕事振を拜見して、自分の遠く及ばないことを悟りましたから、懺悔の爲に御話申す。一體自分は酒ずきで、仕事場に酒を置くことがあり、暑い時には、兩肌脱いで刀を打つこともあります。今貴殿の刀を打たれるさまを見ると、わが身のはしたない心掛とは雲泥の相違、仕事場には、かう〳〵しく注連繩を張り、隅々まで、祓ひ淨め、貴殿も弟子も折目正しい袴をつけて、威儀堂々と槌を取られる。その眼はすこしも外を視ず、その心はすこしも外に散らず、身も魂も其の刀に乘移るかと思ふばかり。それほどの丹誠を籠めてこそ、天下の名刀も打得られることゝ感じ入りました。今まで、腕一つで刀打つものと心得て居たのは愧しい。どうか今から貴殿の弟子として、心の修行をさせて下され」と、懇に賴んだ。正宗は謙遜して一旦斷つたけれども、義弘の熱心已み難いのを見て、遂に弟子にしたといふことである。

（村井寛）

村井寛　號は弦齋、小說家

三〇　ペンギン

凡そ天下に、ペンギンほど人を馬鹿にしたものはあるまい。ぎよろりとした目玉を光らして、人間のやうに兩脚でえつちらおつちらと立つて歩く。脊中には黑、腹には白の綿毛が一杯に生えて、兩の翼が短く垂れてゐる。翼と言つても短いから、これで飛ぶ譯には行かぬ。唯時々これをふたふ

たと上下に叩いて、一つには身體の調子を取り、一つには敵と戰ふ時の武器に使ふ。見たところは、さながら小作りな人が、黑の燕尾服に白のチョッキ白のズボンで、兩手を振つて歩くやうだ。或種のペンギンは、ちやうど襟の處に黑い線があるので、まるで黑のネクタイを締めたやうにも見える。人間に似た所はこればかりでない。ペンギンとペンギンとが出會ふ時は、互にお辭儀をするやうな體で首を下げる。

春先南極圈へ移つて來て、然るべき處に、めい〳〵巢を作つてしまへば、農閑の伊勢詣とでもいふ風に、大勢團體を組んで旅行に出かける。その出かける時は、一人の總指揮官が

あつて、一同はその命に從つて連立つて行く。ペンギンの植民地ともいふべき處には、何十萬といふ大變な數が一所に集つて巢をくふが、そのあひだに何等かの社會的制裁が行はれるものと見えて、餘りはなはだしい喧嘩はしない。中には近所に親を失つた身なし子鳥が、心細げに巢に取殘されて暮してゐるのを見ると、自分の手に引取つて、養育一切の世話を燒くといふやうな、義俠心に富んだ奴もある。又この鳥は大變な見え坊で、胸の白いところが、一寸でも泥にまみれて汚れてゐると、仲間の鳥どもが、例の人を馬鹿にしたやうな顏を見合せて互に嘲り合ふ。こゝらも頗る人間に似てゐる。「善惡ともに人間に似たところが、あまり多

ノルデンシヨルド　スヰーデンの鑛物學者、探檢家

いので、何だかこれを殺すには忍びなかつた」と、探檢家ノルデンショルドもいつてゐた。

ペンギンの種類は色々あるが、その立つて歩くことは一つである。翼が小さくて、飛ぶことの出來ぬ者が、どうして海を隔てた北の方から渡つて來るかといふと、これは泳いで來るのである。泳ぐのは魚類のやうに身體の調子で泳ぐのであつて、兩翼は唯その釣合を取るにとゞまる。泳ぐに脚を使はぬ事は、或人が兩脚に繩をつけて小舟を曳かせた時、平氣で泳いで行つたといふのでも知れる。水では泳ぐが陸では歩く。所で敵に追ひかけられたとか何とかで、大急ぎに驅出さうといふ時は、忽ち身を倒して腹這になつて

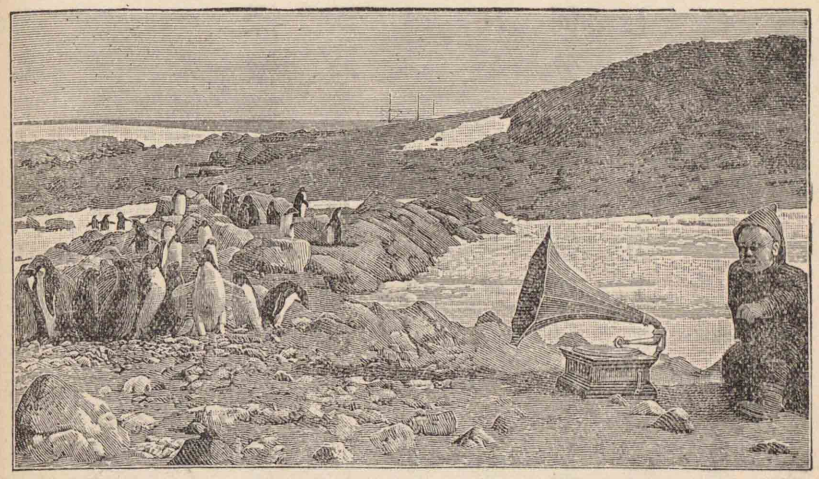
シャックルトン　イギリスの大尉で探檢家

マーストン　シャックルトンと共に南極探檢に行つた人

一瀉千里の勢で橇のやうに氷の上を滑り走る。その早いことは、到底人間業では追ひつけぬくらゐである。

ペンギンの音樂を好むのは有名な話で、シャックルトンの探檢隊が、南極に止つてゐた時、一行中の滑稽家マーストンが、時々蓄音機を氷の上に持出してやつて見せた。するとペンギンが、十羽二十羽とおひ〳〵に集つて來て、遠卷にこれを取圍んで、感心して聞いてゐたといふ。

何分氷雪の外に見るものゝない處とて、よく〳〵無聊に苦しむものと見えて、何か變つたことがあると、ペンギンどもは隨分遠方まで見に來る。大勢で來る時は、必ず指揮官が一人ついて、その指揮に從つて行く。シャックルトンの一



極地の慰

行が、自動車を動かしたり冬營の小屋を建てたりしてゐるのが、ペンギン社會の大問題となつたと見えて、如何にも珍しさうに熟心に見に來たといふ。

大勢づれのペンギンが、途中人間か犬かに出會つた時は大變である。假に彼方から人間が來たと見ると、ペンギン一同遠くではたと立ちどまる。先づ一行中の雄が一羽出て來て恭

しく首を下げる。やゝ伏目になつたまゝで、何やらん長々と挨拶の言葉がある。不幸にして人間には、唯カカカガアガアと聞えるばかりである。挨拶の臺詞終つて後、初めて首を上げて、今度はずつと仰向いて、嘴で大きな輪を一つ畫いて、さて、ひよつと人の顏を見る。「お分りになりましたか」といふ風だ。

元より以てお分りになるべき筈のものではない。人間はぽかんとして立つたまゝだ。こゝに於てペンギンは、此奴分らぬわいと見て取つて、今一度前の挨拶を長々とくりかへす。それでも分らぬと見たら、今度は他のペンギンどもが、がやゝいつて承知しない。其處で前に挨拶に出た男

は、大きに面目を失つて引下る。するとこの度は、代り合ひまして代り榮えもいたしませぬ別の雄鳥が出て來て、又前と同じカカカガアガアをやる。

相手が人間なら、譯の分らぬ長臺詞も面白半分我慢して聞いてやるが、これが犬でもあつたらそれこそ騷だ。シャックルトンの探檢記の中にある話だが、或時ペンギンども、右の順序で犬に挨拶をしたが、元より犬に分らう筈はない。そこでペンギンが腹を立てて、三羽一時に例のカカカガアガアをやり出した。犬は面喰つて、わん〳〵と吠える。他のペンギンはきよとんとして呆れて見てゐる。これを見てゐた人間は、いづれも腹を抱へざるはなかつたといふ。

杉村廣太郎
號は楚人冠。東京朝日新聞記者

最後に斷つておくが、ペンギンは南半球特有の動物であつて、最も多くゐるのは南極圏内及びその附近である。北極のオークといふのが、これに似てゐるとて、一にこれを「北極のペンギン」と稱へることがあるが、これはまるで種類が違つてゐる。

（杉村廣太郎―へちまのかは）

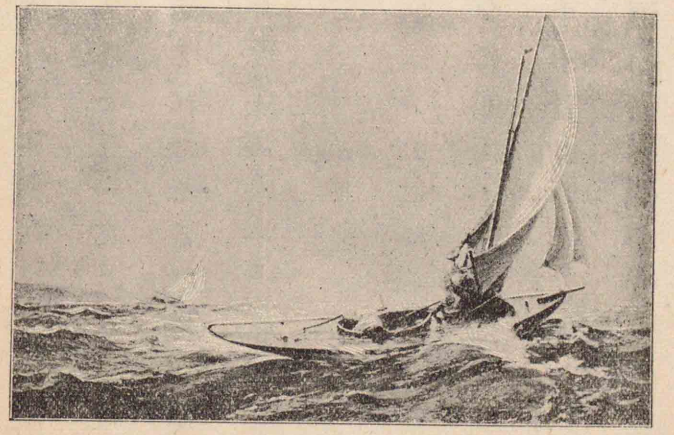
三一　大海原

大いなるかな大海原　　朝に夕にどう〳〵と
動き轟き夜もすがら　　大浪小浪寄せ返る
何處に打たぬ浪を見ん　　いつ浪の音を聞かざらん

大いなるかな大海原
崩すとも海は埋るまじ
世界の川々絶間なく
注げども海は長へに
不增不減の瑠璃の色

長閑けき樣は海にあり
風なぎはてし春の沖に
朧にうつる月見れば
あらぶる心もなぎぬべし
松島かげの朝ぼらけ

世界の山々ことゞく
蓬萊山もよそならず



坪内逍遙
文學博士。文學者。早稲田大學教授

凄じさはた海にあり
はやて起つて浪立てば
大高潮の逆卷けば

春秋二季の大あれに
甲鐵艦も木の葉と漂ひ
村々流れて跡もなし

山は崩れ川は涸れ
陸には古今の別あれど
神代の姿そのまゝに

國興亡し人變り
海原のみは開闢の
動き轟き寄せ返る（坪内逍遙）

加藤清正
豐臣秀吉の臣。慶長十六年（一二一七一）歿、五十歳

三二　加藤清正と熊本城

熊本城は彼の勇猛無比の武將として知られた加藤清正の

築いた天下の名城である。凡そ城郭といふものは、いづれも堅牢堅固でないものはないが、熊本城の如きは、特にその著しいものである。さればこそ封建時代の遺物でありながら、尚能く明治十年の役に慓悍比なき薩摩隼人の軍を引受けて、籠城の目的を達し得たのである。

明治十年の役　西郷隆盛の亂

籠城　此の時の守將は陸軍少將谷干城

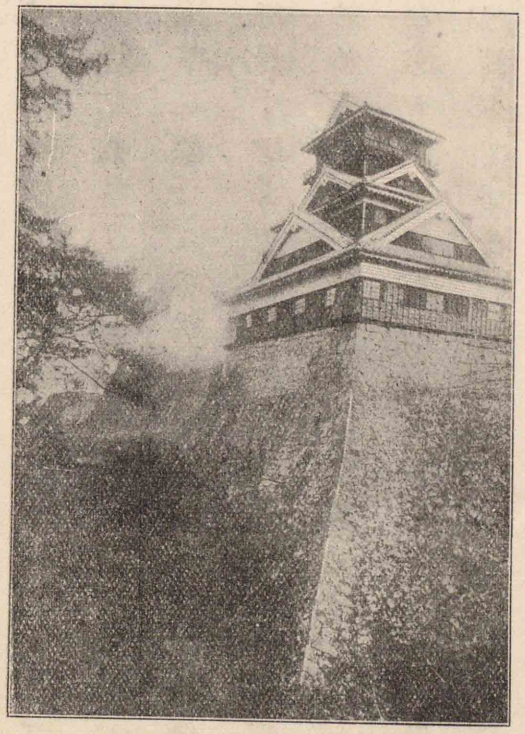
熊本城は丘陵の一角に築かれたもので、坪井川及び白川の流を天然の濠として居る。隨つて城濠の見るべきものはないが、その高い、屈折を極めた石垣は、確に一偉觀で、彼の名古屋城の天守閣の築造者として名高い清正が築いたに背かず、さすがに堂々たるものである。

城内の通路の複雜な事、屈折をなして居る事も、やはり防備

に注意した結果である。併し天守閣を始め、數多の櫓や多聞長屋の建築等は、極めて質素に出來てゐる。名古屋城は、五層の大天守閣が全部白堊で壯麗なる美觀を發揮して居る上に、燦として尾陽の空に輝く金鯱によつて、益〻その名を天下に謳はれて居るが、熊本城の建築はこれに反して、極めて見すぼらしい。その建物は黑い板張の建築で、本邦城郭の特色ともいふべき白壁造ではない。又その屋根の工合なども、住宅建築に似たもので、城郭の壯麗を誇るべき外觀は備へて居ない。

さはれ城郭の價値は實用であつて、外觀では無い。壯麗なる威容も結構ではあるが、實戰に役に立たなくては、何にも

ならぬ。熊本城は質素である、恰も風采の汚い野武士のやうな趣がある。併し實用の點は十分に注意が屆いて居て、外觀は粗末でも、銃眼その他、側防・俯射の設備に缺けた點は無い。唯惜しいことには、天守閣の建物が焚けてしまつたため、今ではその石垣が殘つて居るに過ぎない。



熊本城

熊本城の建築が黑い板張であるのは、敵の目標となることを避けるためと思はれる。岡山城の天守も板張で黑いところから、昔から、これを「烏城」と稱して居るが、熊本城の如きは、岡山城よりも更に烏城であるといつても宜しい。

壯麗な名古屋城を、緋縅の鎧着て床几に腰をかけた大將に較べるならば、熊本城は卽ち黑皮縅の鎧に身を固め、大身の槍を小脇にして、馬を陣頭に進めた百戰練磨の勇士である。この點に於て、熊本城はたしかにその築造者たる加藤清正の俤を彷彿せしめるものといつて宜しい。質素儉約、しかも武備は一日も忽にせぬ。これこそ實に清正と熊本城の一致する點である。

併し清正は決して武勇一片の大將ではなかつた。人情に

厚く、殊に領内の民政には一方ならぬ功績を擧げて居る。城の濠となつて居る坪井川や、その他肥後の四大川といはれて居る球磨川・緑川・白川・菊池川に大工事を施して、水運を便利にして船の通路を開き、又灌漑の便を計つて、新しく田地を開いた事も一再ではなかつた。そして此等の大工事は後世に非常な恩惠を遺したもので、肥後平野の開墾は、實に朝鮮八道に鬼上官の名を謠はれた猛將清正に負ふ所が多いのである。又熊本城は別名を銀杏城とも呼ばれて居るが、これは清正の植ゑた銀杏樹が本丸に在るからである。清正が試みた河流の護岸工事は堅固を極めたもので、後年大洪水でその石垣が崩れたとき、更にその下に一重の石垣

大類伸
文學博士。歷史家、東京帝國大學助教授

があることを發見した。萬一の際を慮つて、二重の石垣を築いてあつたのである。これによつても、用意周到な清正の面目を察することが出來よう。

熊本城が質素にして實用に缺けた點の無い事も、やはり清正の事業としてふさはしいことと肯かれる。俗謠に「敵に勝たう(加藤)の城の主」と謠はれた清正は、戰場に馳驅する以外に、尙上述の如き眞面目を發揮したのである。

（大類　伸）

大正國語讀本 卷一終

大正國語讀本第三修正版　全拾册
卷一　定價金四拾參錢
大正十五年度臨時定價　金七拾參錢

大正五年九月廿八日發行
大正五年十二月廿五日訂正發行
大正七年十二月十五日修正再版發行
大正十二年一月十六日第二修正訂正發行
大正十四年九月十八日第三修正版發行
大正十四年十一月廿四日第三修正訂正印刷
大正十四年十一月廿八日第三修正訂正發行

著作者　東京市外中野町字大塚一六二五番地　保科孝一

發行者　東京市牛込區白銀町二十九番地　合資會社育英書院　右代表者　目黑甚七

印刷者　東京市神田區錦町三丁目十八番地　白井赫太郎

印刷所　精興社

著作權所有

發行所　東京市牛込區白銀町二十九番地　合資會社育英書院　振替口座（東京）七四二番

發賣所　東京市京橋區南傳馬町二丁目　目黑書店　振替口座（東京）二八〇九番

はしな